

始



独逸語彙音圖解  
丸山通一著

1287

PHONETISCHE  
ANSCHAUUNGSBILDER  
MIT  
ERLÄUTERNDEN TEXT

獨逸語發音圖解

丸山通一著

323-287



PHONETISCHE  
ANSCHAUUNGSBILDER  
MIT  
ERLÄUTERNDEN TEXT

# 獨逸語發音圖解

丸山通一著

東京

南江堂發行

大正七年

大正

7. 11. 27

内交



概圖者集編漢書

卷一百一十五



Herrn Dr. K. Kikutsi

gewidmet

## 叙 言

發音は語學で最初に稽古をするものだから容易で平凡な事のみ思ふて居る人が多い様であるが、實は辯士や俳優や聲樂家でさへも難しとする所であつて、是等の人々の爲めに書いた雄辯學や朗讀法や美聲術などにも高等藝術の基礎として嚴かに論じてある。問題は方言や生理や心理に亘るのであるが、先づ方言の勢力だけを考へても發音の難問であることが直にわかる。俗人は自己の方言を絶対に正しいものであると思ふて居るから他人の發音を聞いてそれを嘲笑する。偏屈な方言崇拜家の中には正謬はさて措いて他人の發音を真似る事すら出来ない生理的無能者が少くない。よしや自己の方言を離れて自在に他人の發音を真似れ得る人で標準語を語つて居る自信して居つても識らず識らず故郷の訛が言葉や音に現はれる。それを完全に避け得る人は極めて稀である。外國語を學ぶのにも最初から正則の稽古をせれば甚しい惡結果を生ずる。外國語を學ぶ場合には其國の標準語にも方言にも無い様な誤つた發音を覚え込む恐れがあり、又自己の故郷の土音を語つて改めない弊も起る。教師さても發音の巧な者もあれば拙い者もあり、自分は上手でも初學者に説明傳授することの下手な人もある。發音を學ぶには是非とも善い教師に就くことが必要であつて、到底書物を以て之を補ふ事は出来ぬけれども善い教師の無い場合には書物も有益な羅針盤である。よしや善い教師を得たとしても豫習復習に適當な参考書を備へて居ることは萬全の策である。發音や習字は間に合はせて済ますと云ふ杜漏な風は改めればなるまい。

友人菊池惠次郎君は經濟學を研究し、大學を卒業したらば船を買ふて外國貿易を營むのを宿志として居られた。明治三十三年法學士になると間もなく支那漫遊に行かれたのも宿志を實行する第一歩であつたと思はれる。船主と外國貿易とは切り離す事の出来ない關係もあるまいから、その

ごちらかで成功せられても今日は我國有数の實業家となられたであらう。所が菊池君は金儲けばかりに没頭しては居られぬ程多藝多能である。第一耳が善いので音樂の嗜みが有つて學生時代からメートル附きの三味線を案出したり、卒業後も中外商業新聞に三味線の樂理を論じたりせられた。素よりそれは餘技であつて其頃から類に經濟學の新著を翻譯して居られたので Grunzel の Grundriß der Wirtschaftspolitik などを持つて相談に來られたことも時々あつた。つまり學者を蟬脱することが出来なかつたのである。其後大坂では自然實業にたづさはる境遇に居られたけれども、中學以來英語が得意であつた菊池君は何時の間にか語學の方に深入りして佛語、西語、葡語、露語、馬來語と次第に研究の歩を進められた。言語學を根本的に研究する志をも有つて居られるが、是迄研究せられたのは主として貿易語又は植民語と稱すべき種類の國語である。それには大に理由がある。菊池君は數年前から移民の世話をして居られたので昨年は自身もブラジルへ渡航せられる筈であつたが、都合があつて友人の法學士某が先發した。所が今度はいよいよ菊池君自身が出發されることになつた。二十年前には我輩も植民事業のために伯國へ渡航する運命が迫つて居つたのに實行に至らずして止むたのであるから、今同じ目的で同じ處へ行く菊池君を送るのは聊か奇妙な因縁の様にも感じられる。菊池君は實地に就いて漸習みをした上で郷里の町長をして居られる令弟の理學士菊池清治君と共同の開墾事業を起される様に聞いて居る。所が中學生時代から特に數學が上手で學理の研究を好む令弟は再び東京の學海に乗り出されるかも知れぬし、菊池君も三年間讀書をするつもりで準備をした、土話の研究もするま云はれた。つまり豪農になられるのか矢張り學者になられるのかまだわからぬ。斯んな風であるから曩に我輩が實驗音聲學の器械を買ひ入れるのに賛成して、注文のために奔走し、代金を立て替へ、その償却のため寄附金を募ることに盡力せられた。二十餘年の親交を追想しつゝ、錢として特に發音に關する小冊子を贈るのはこの故である。

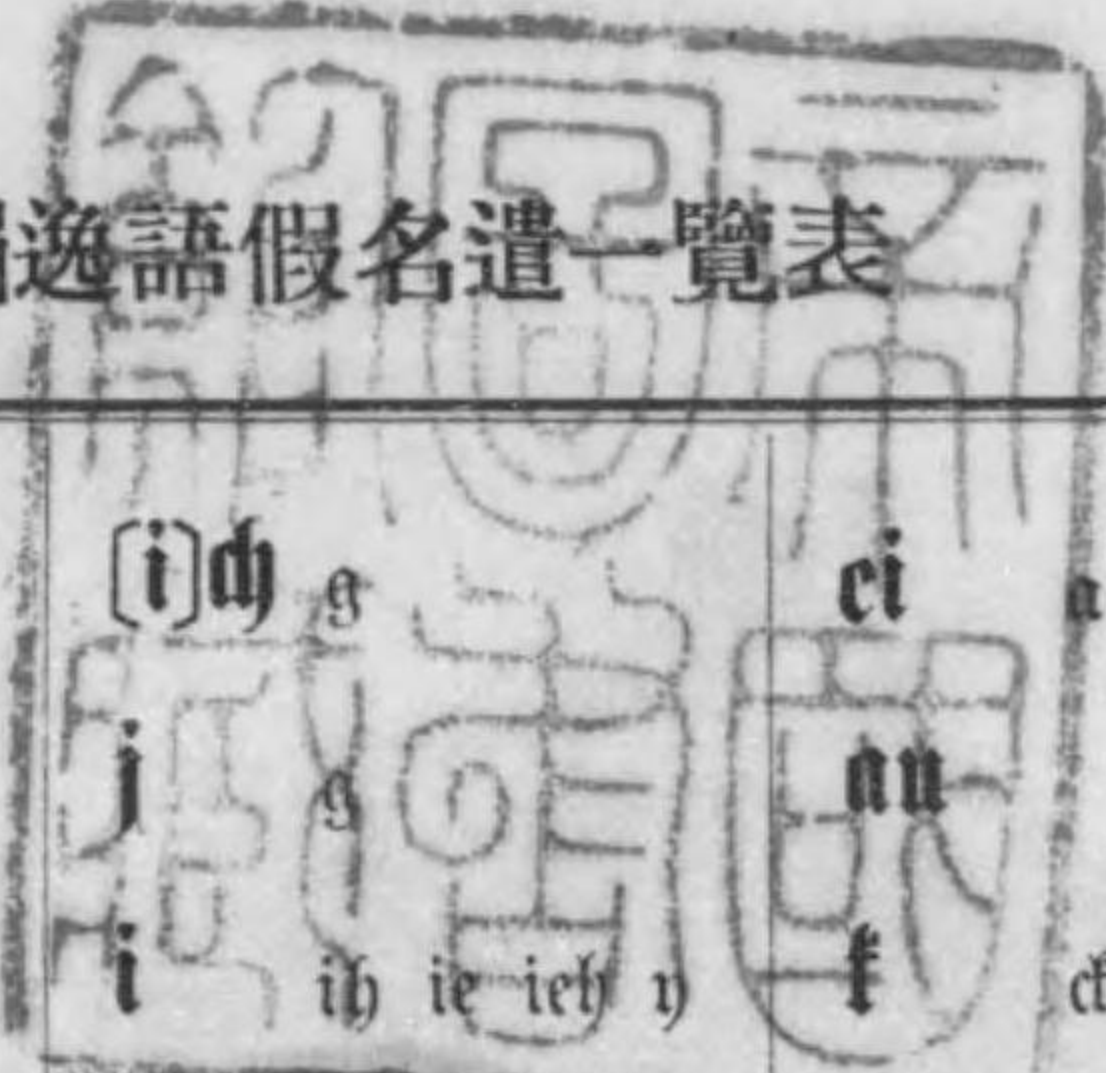
大正七年八月二十五日

丸山通一

## 目次

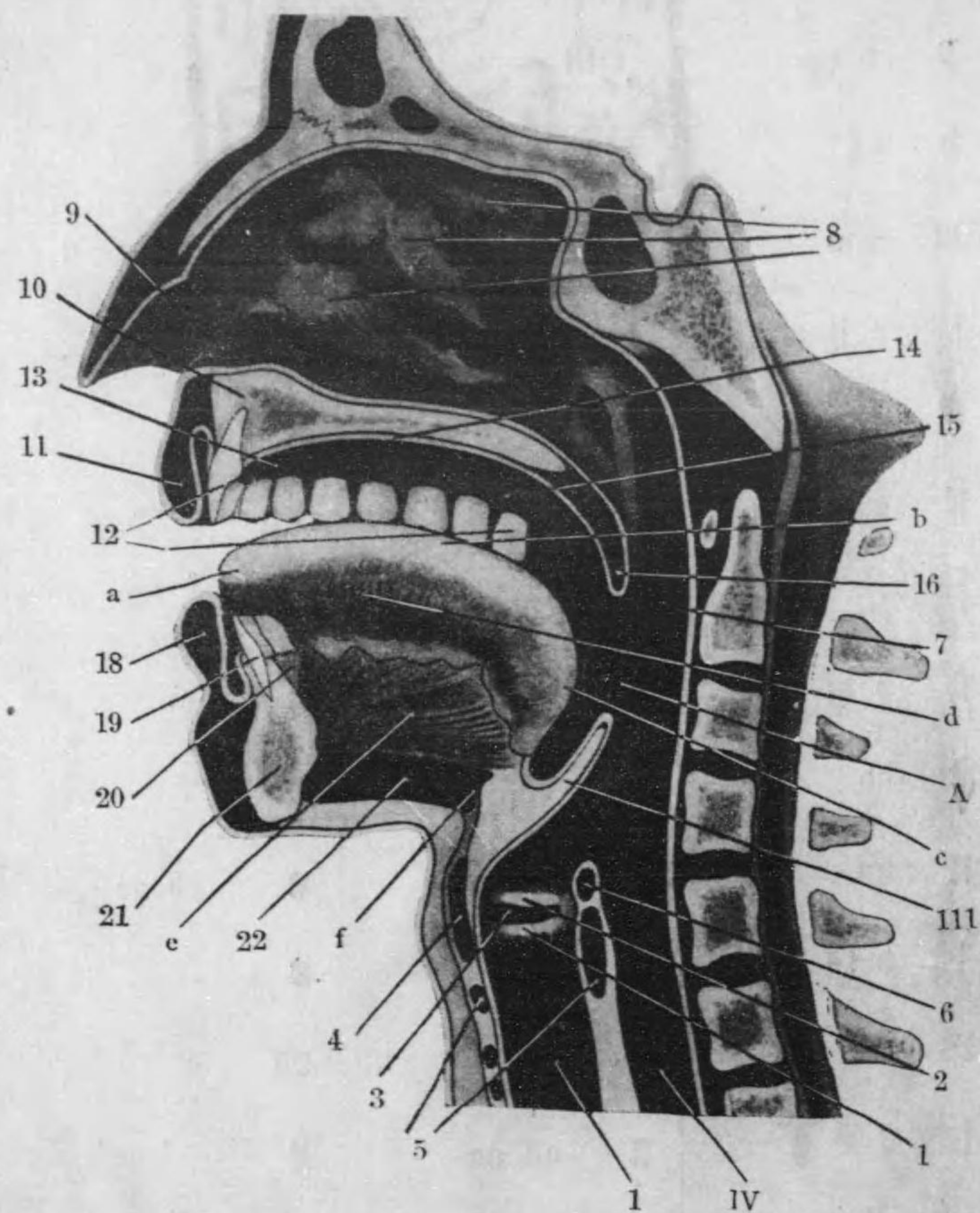
獨逸語假名遣一覽表 .....	1
人頭縱斷圖と其説明 .....	2
音聲の生理 喉頭圖三、母音發生比較圖 .....	4
音聲分類表 .....	7
母音圖解 三十五圖 .....	10
子音圖解 六十四圖 .....	19

獨逸語假名遣一覽表



p	b pp	(i)h s	ci	ai
b	bb	j	an	
m	mm	i	ih ie ich y	f
f	v ff ph	i	y	r
w	u	ü	üh y	g
ß	s ff f	ü	y	ng
f		e	eh ee	(a)h g
t	d dt tt th	e		u
d	dd	ö	öh	u
n	nn	ö		o
ß	ß ts ds t c	ä	äh	o
r	rr	ä	e	eu
l	ll	a	ah aa	h
sch	f	a		

第一圖 人頭縱斷面



- I. 氣管
- II. 喉頭
  - 1. 真聲帶
  - 2. 假聲帶
  - 3. モルガニ腔
  - 4. 甲狀軟骨
  - 5. 環狀軟骨
  - 6. 披裂軟骨
- III. 會厭
- IV. 食道
- V. 咽腔
  - 7. 咽腔後壁
- VI. 鼻腔
  - 8. 鼻甲介(上、中、下)
  - 9. 鼻翼(右)
- VII. 口腔
  - 10. 上顎骨
  - 11. 上唇
  - 12. 上齒列(門齒、犬齒、臼齒)
  - 13. 上齒齦
  - 14. 硬口蓋
  - 15. 軟口蓋
  - 16. 懸壅垂
- 17. 舌
  - a. 舌尖
  - b. 舌背
  - c. 舌根
  - d. 舌緣
  - e. 舌韌帶
  - f. 舌骨
- 18. 下唇
- 19. 下列門齒
- 20. 下顎齒齦
- 21. 下顎骨
- 22. 口底



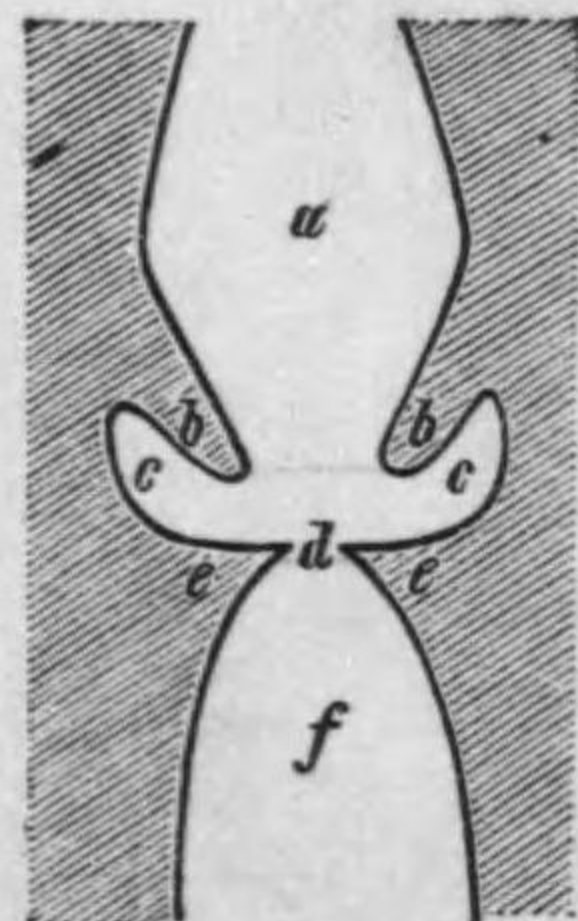
### 音聲の生理

専ら生理上より見れば音聲は呼吸器と聲帯と口鼻との協力作用に依りて生ず。

#### I. 呼吸器とは横隔膜と肺臓と氣管とを謂ふ。

1. 横隔膜は皮に似たる薄き筋にして胸腔と腹腔とを隔離するものなり。此筋の不随意なる反復的收縮と胸廓の響應的擴大とは胸腔の容積を増大す。
2. 肺臓は極めて薄き皮を以て包まれたる海綿に比すべく、胸腔の擴大と縮小とにつれて外氣を吞吐す。
3. 氣管は外氣を肺臓に導く隧道にして、其上端は擴大して喉頭となり、其下端は氣管枝となりて左右兩肺に達す。

第二圖 喉頭縦斷



a 喉頭腔      d 聲門  
bb 假聲帯    ee 聲帯  
cc モルガニ腔    f 氣管

4. 呼吸は上に述ぶるが如く自然に行はるれども、談話の際には比較的少量の外氣を迅速に吸入して緩慢に排出すること随意なり。

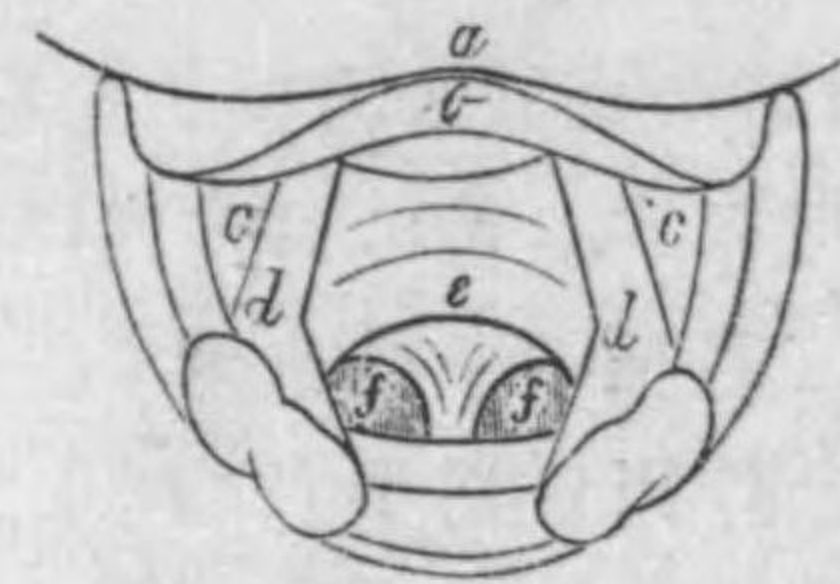
II. 聲帯は喉頭の内面に在りて左右に隆起す。其性小なる舌に少々似たれども、伸縮自在なる事之に勝れり。聲帯の作用は不随意なり。密閉せる聲帯を突破する呼氣は彈音となる(字無し)。

狭窄せる聲帯の面を摩擦して生ずる音はりなり。相接せる聲帯の間隙を貫通する呼氣は聲帯を震動して樂音

即ち聲を生ず。此震動音の伴へる呼氣の口腔に達して伴鳴應響を起すものを母音と謂ひ、狭窄又は閉塞に逢ひて生ずる音を有聲的子音と謂ふ。我が國語に於て濁音と稱するものは有聲的子音に始まる音團なり。

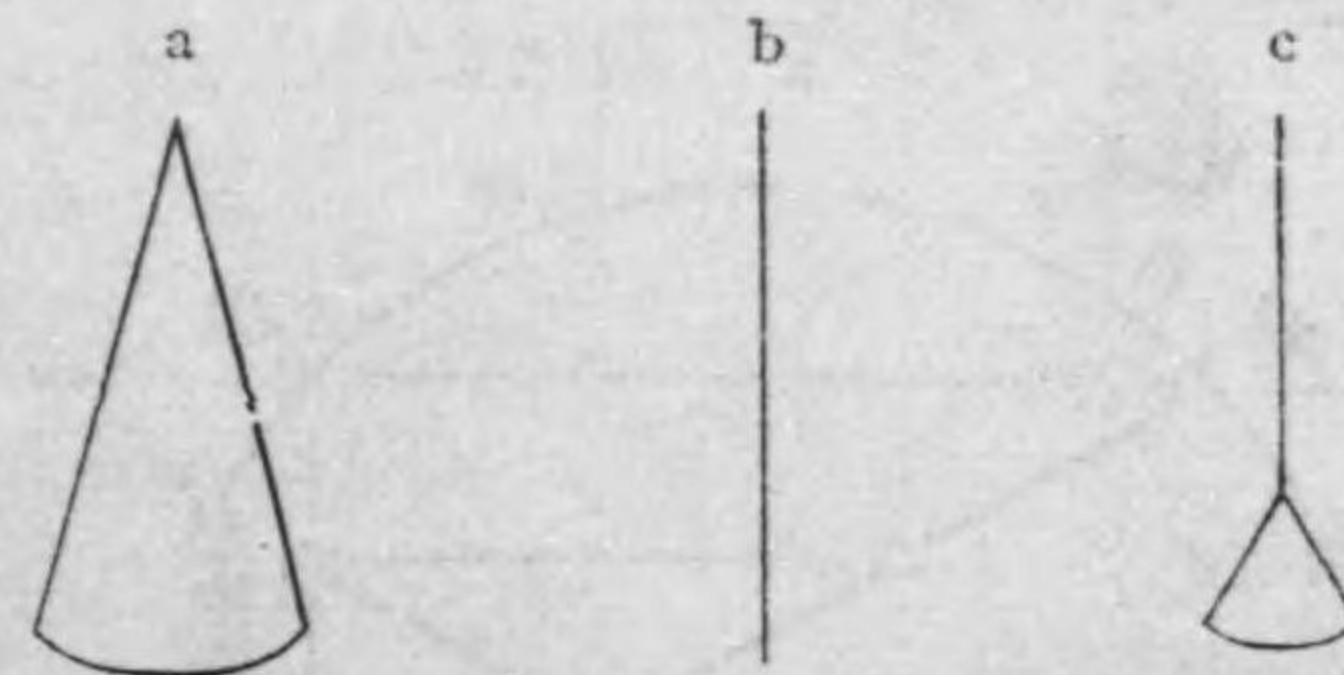
第三圖

上より見たる喉頭の内部



a 舌根      dd 聲帯  
b 會厭      e 氣管  
cc 假聲帯    ff 氣管枝

第四圖 聲門(略模型)



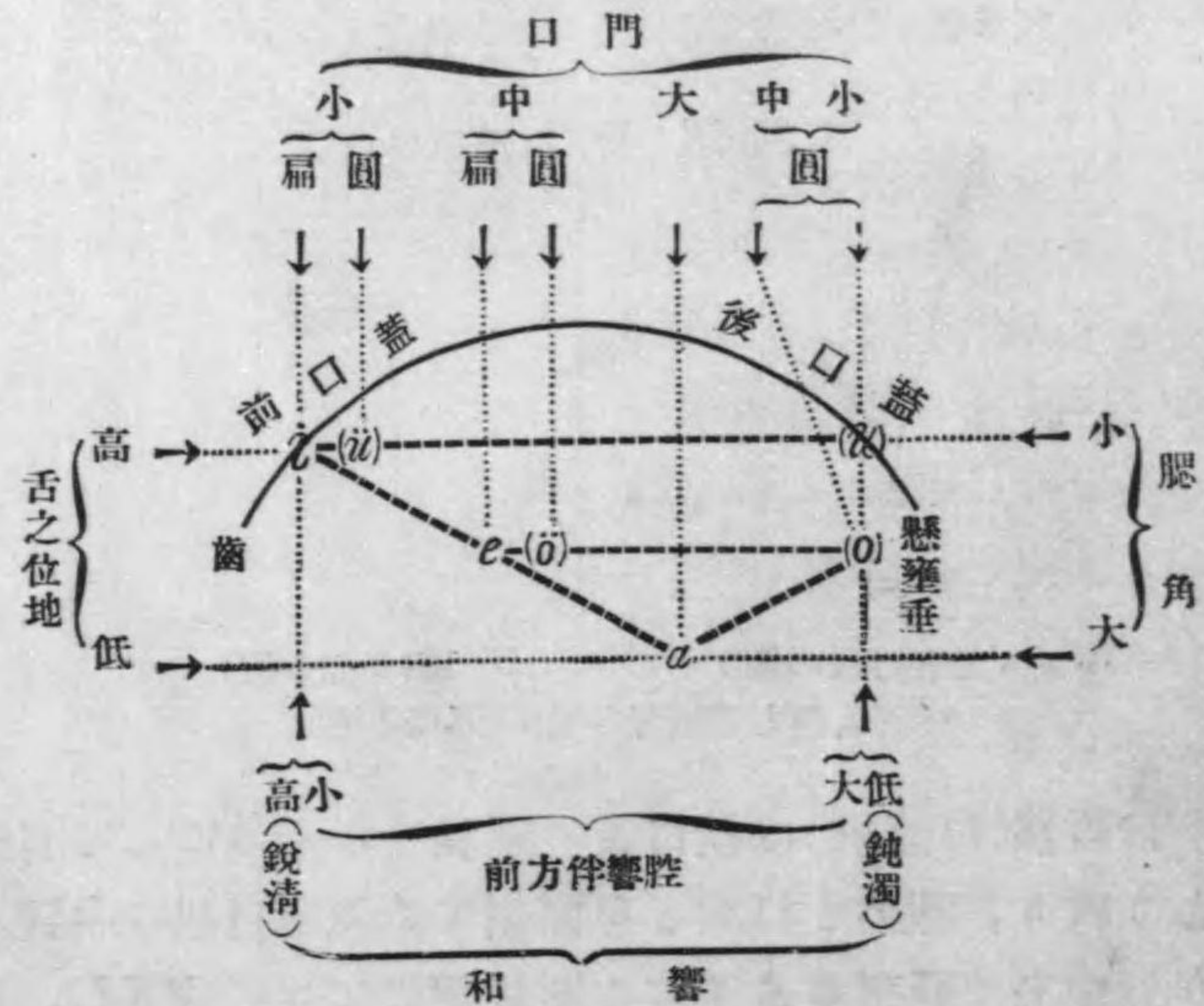
a 開(呼吸の際)      b 閉(發聲の際)  
c 閉、但し呼吸隙を残す(耳語の際)

III. 口蓋幕(口蓋帆)は軟口蓋の延長せるものにして筋肉より成り、咽腔と口腔とを區劃する運動自在の中壁なり。中央は懸垂垂と稱する圓錐體となりて垂下し、左右は前後各二箇の口蓋弓となる。口蓋幕の作用は不隨

意なり。懸壅垂呼氣に動かされて後舌を撃ち氣道の杜塞を反復せば一種の r を生ず。口蓋幕の重大なる任務は咽腔と鼻腔との間を杜塞して呼氣の鼻腔より逸出するを防止するに在り。之に因りて口音と鼻音との二大門成る。

IV. 舌の位置と下顎の上下は口腔の形状と容積とを變ず。是れ母音に音色の別ある所以なり。舌は口腔内に於て隨處に狹窄又は閉塞を起して各種の子音を發す。上下兩唇は口門に據つて亦同一の作用を爲す。

第五圖 母音發生比較



## 音聲分類表

### I. 鼻腔杜塞音

#### 1. 有聲音

#### A. 開口音

- a. 聲帶相接す: i, e, a, o, u (純粹).  
ö, ü (混淆).
- b. 聲門狹窄: h (稀に母音の間に於て).

#### B. 半開口音

前舌上齒齦音: l.

#### C. 反復性杜塞音

- a. 前舌上齒齦音: r.
- b. 後舌懸壅垂音: r.

#### D. 合口音

- a. 兩唇音: w (南獨).
- b. 下唇上齒音: w (北獨).
- c. 前舌上齒齦音: j.
- d. 中舌中硬口蓋音: j.

#### E. 閉口音

- a. 兩唇音: b.
- b. 前舌上齒齦音: d.
- c. 後舌後硬口蓋音 (i, e の前に於ては前進): g.  
後舌後硬口蓋音 (o, u の前に於ては後退): g.

## 2. 無聲音

## A. 開口音

聲門狹窄: h.

## B. 合口音

- a. 下唇上齒音: f.
- b. 前舌上齒齦音: ð.
- c. 前舌上齒齦音: tch.
- d. α. 中舌中硬口蓋音: ch (ich に於けるが如し).
- β. 後舌後硬口蓋音: ch (ach に於けるが如し).

## C. 閉口音

- a. 兩唇音: p.
- b. 前舌上齒齦音: t.
- c. α. 後舌後硬口蓋音 (i, e の前に於ては前進): f.
- β. 後舌後硬口蓋音 (o, u の前に於ては後退): f.

## II. 鼻腔開放音

(有聲的閉口音)

- a. 前唇音: m.
- b. 前舌上齒齦音: n.
- c. α. 後舌後硬口蓋音 (i, e の後に於ては前進): ng.
- β. 後舌後硬口蓋音 (o, u の後に於ては後退): ng.

註一。開口音 u, o, a, e, i; ü, ö は其の程度に依りて更に之を開合の二種に別つことを得べし。其差別の最著きは u, o; ü, ö にして他は之に次ぐ。是等はいづれも短音の場合には開音にして、長音の場合には合音なり。

e にも同様の傾向ありて、北獨の人は概ね文字の e たるど ä たるを問はず、短ければ開音とし、長ければ合音とす。但し ä の長音を開音として語することは稀ならず。南獨にては例之ば *Besen, Degen, Speer, Schwert* 等に於ける長音の e を開音とし、*Ähre, Föhre, säen, spät* 等に於ける長音の ä や *Blätter, Äcker, Ställe, Wäsche* 等に於ける短音の ä を合音とするなど、語源を知らざるものは大に其の區別に苦まざるを得ず。故に初學者は短音の e 又は ä と長音の ä とはいづれも開音、長音の e は合音と心得ふるより外には別に妙案あるべしとも思はれず。第九圖、第十圖に添へたる例は特に南北いづれの發音に依るも一定せる語を選べり。

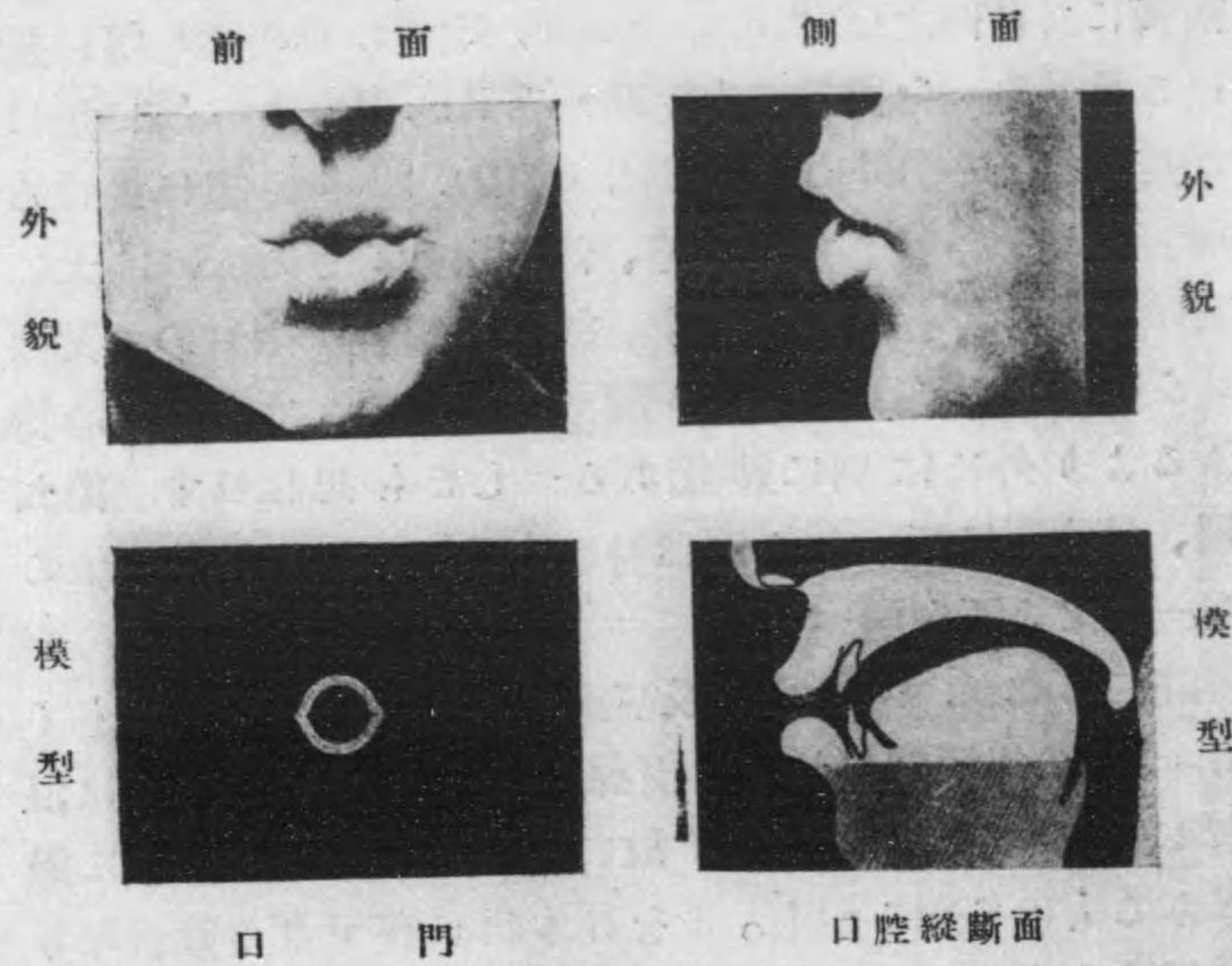
註二。ü, ö, ä は語源及び文法の上より見れば均しく u, o, a の半轉音なれども音聲學上より見れば ü, ö は混音にして ä は間音なり。故に ä は e の開音を示すに過ぎざるものと知るべし。ä を日本語に存せざる難音なりと信する者あれども、決して然らず。

註三。北獨の土音には後舌後硬口蓋音の j あり。g の字の發音に現はるゝもの即ち是なり。之を語頭と語心とに有するは *Friesland* の方言、之を語心のみに有するは例之ば *Westfalen* の方言にして、多くの方言は語心の a, o, u の前に於てのみ之を有す。

註四。ff, ch, ng, tch 等は二字又は三字相合して一音を示す。之に反して qu は二字にて kw の二音を示し、ss と s といづれも一字にて ff と ff との各二音を示す。

第六圖 II.

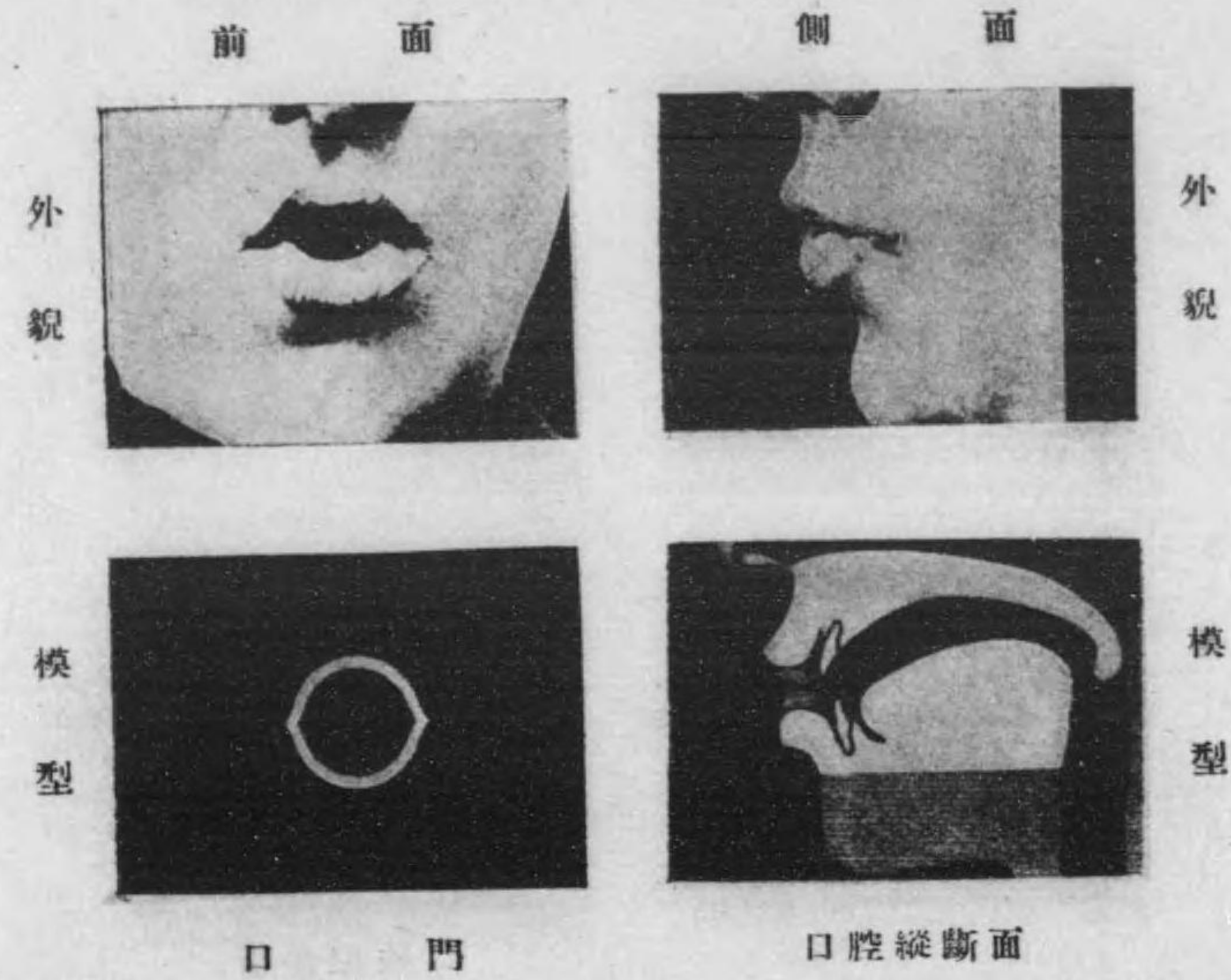
長音の例: der Hut. 短音の例: der Hund.



唇 尖りて突出し母音の中にて最小なる口門を成す(縦3-5mm)。  
 縮小の程度は短音の場合よりも長音の場合に於て更に甚し。  
 歯 上下の門歯前後併列して殆んど相重なる。  
 舌 後退して前方低く後方隆起す。  
 口蓋幕 咽腔後壁に接して氣流の鼻腔に達するを防ぐ。  
 聲帯 震動す。  
 氣流 尋常。

第七圖 O.

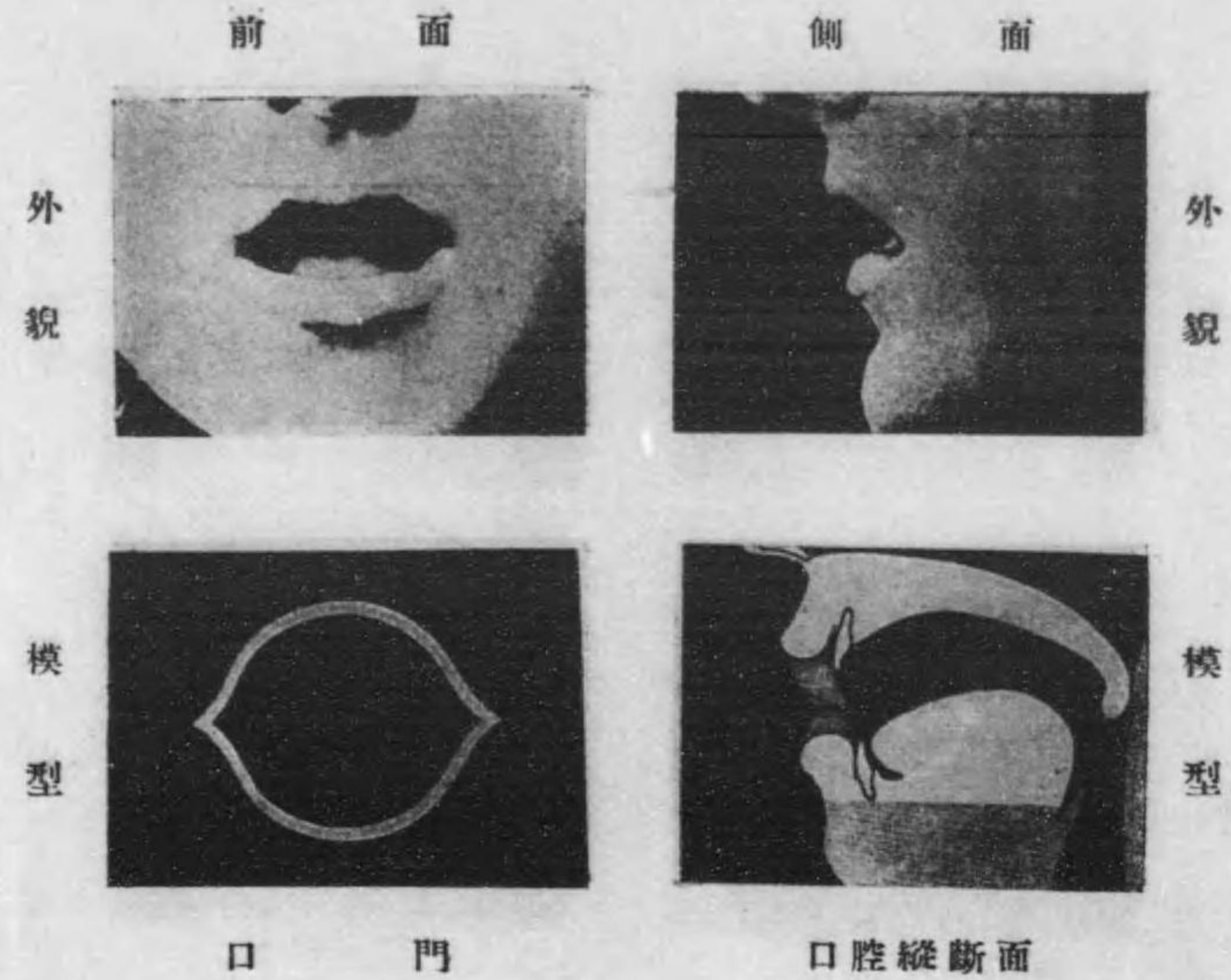
長音の例: der Ofen. 短音の例: offen.



唇 尖りて突出し、小なる口門を成せども(縦7-10 mm)、uに於けるが如く甚しからず。短音のoに至つては殆んど突出を要せずして口門も聊か擴大す。  
 歯 上下門歯の垂直間隔 5-8 mm。  
 舌 後退して前方稍低く、後方隆起す。  
 口蓋幕 咽腔後壁に接して鼻腔に達する氣道を閉塞す。  
 聲帯 震動す。  
 氣流 尋常。

## 第八圖 a.

長音の例: lahm. 短音の例: das Laum.



唇 縦 15-20 mm の口門を成す。

歯 上下門歯の垂直間隔 7-12 mm。

舌 口底上に安座する自然状態にして中央少々隆起す。

口蓋幕 咽喉後壁に接して氣流の鼻腔に達するを防ぐ。

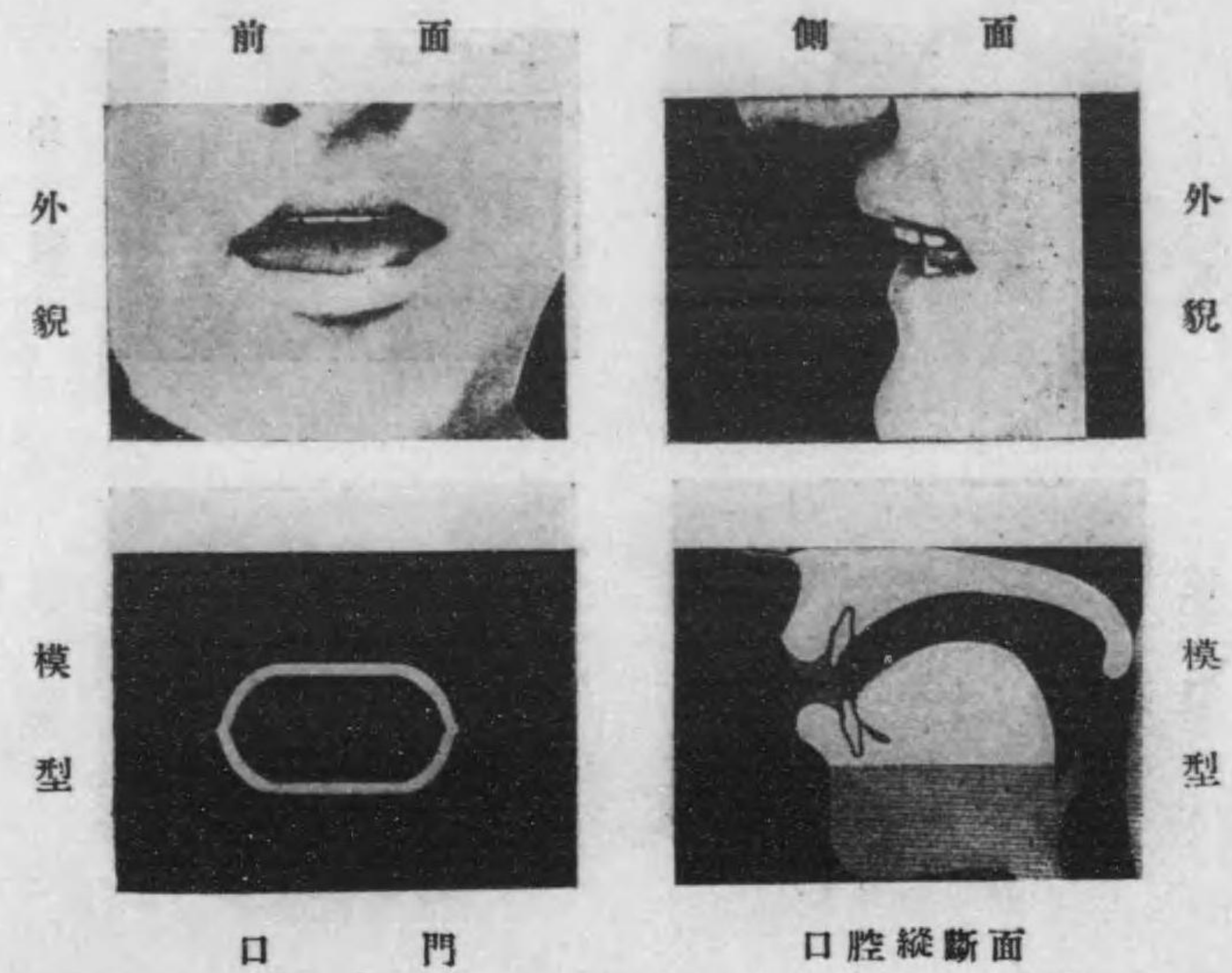
聲帯 震動す。

氣流 尋常。

## 第九圖 ä.

長音の例: der Bär, die Säge; der Käfer.

短音の例: der Berg, das Feld; der Tänzer.



唇 縦 12-15 mm の口門を成す。

歯 上下門歯の垂直間隔 7-10 mm。

舌 左右に又殊に前方に延び、中央隆起して兩側は上顎の臼歯に  
觸る。

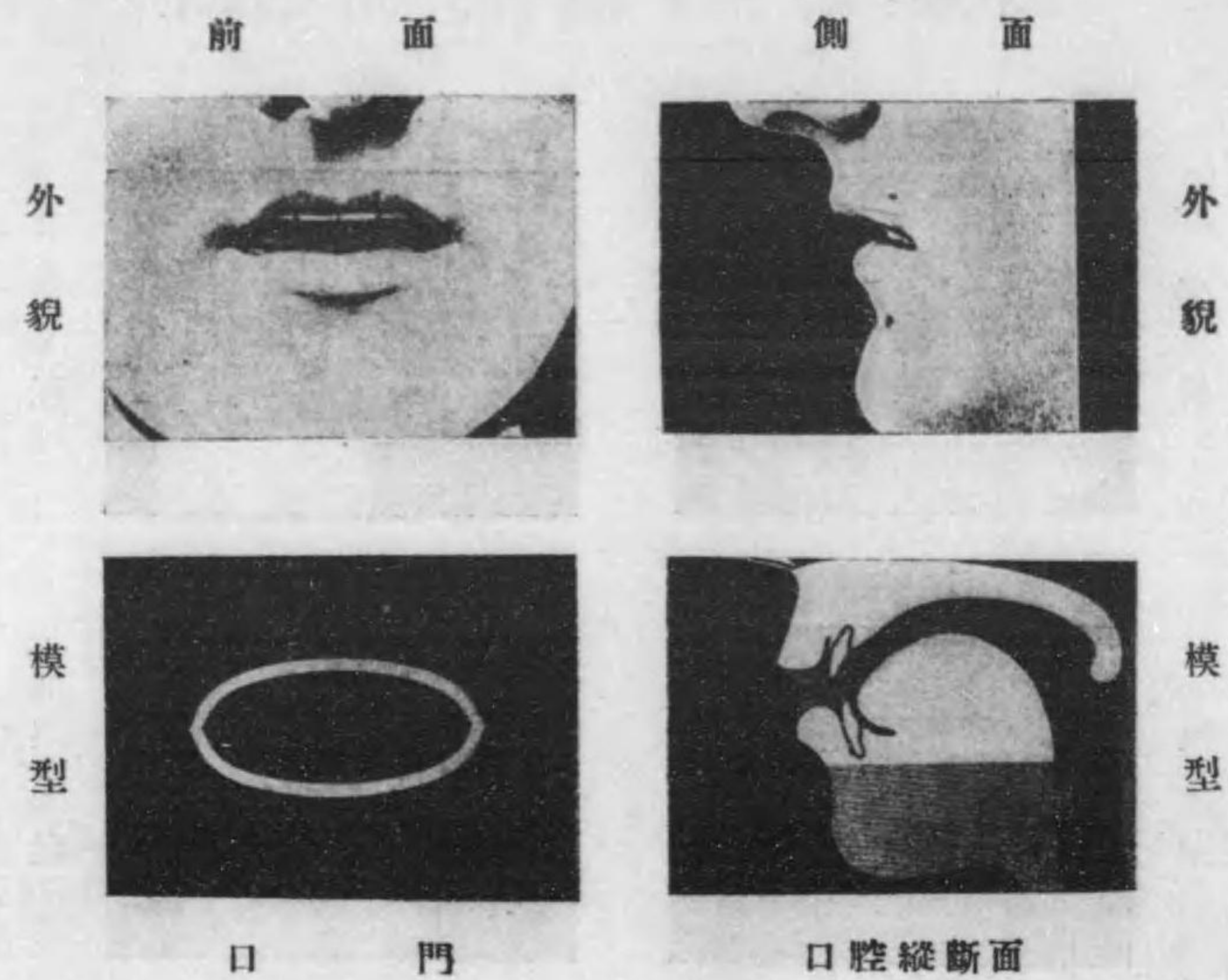
口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動す。

氣流 尋常。

## 第十圖 c.

長音の例: der Efel, die Ehre, edel.



唇 口門平扁にして、左右の口角少しく後に引き締まる。間隙縦 7 mm。

齒 上下門齒の垂直間隔 1-2 mm。

舌 中央隆起して両側は上顎の臼齒に觸れ、尖端は軽く下顎の門齒を押す。

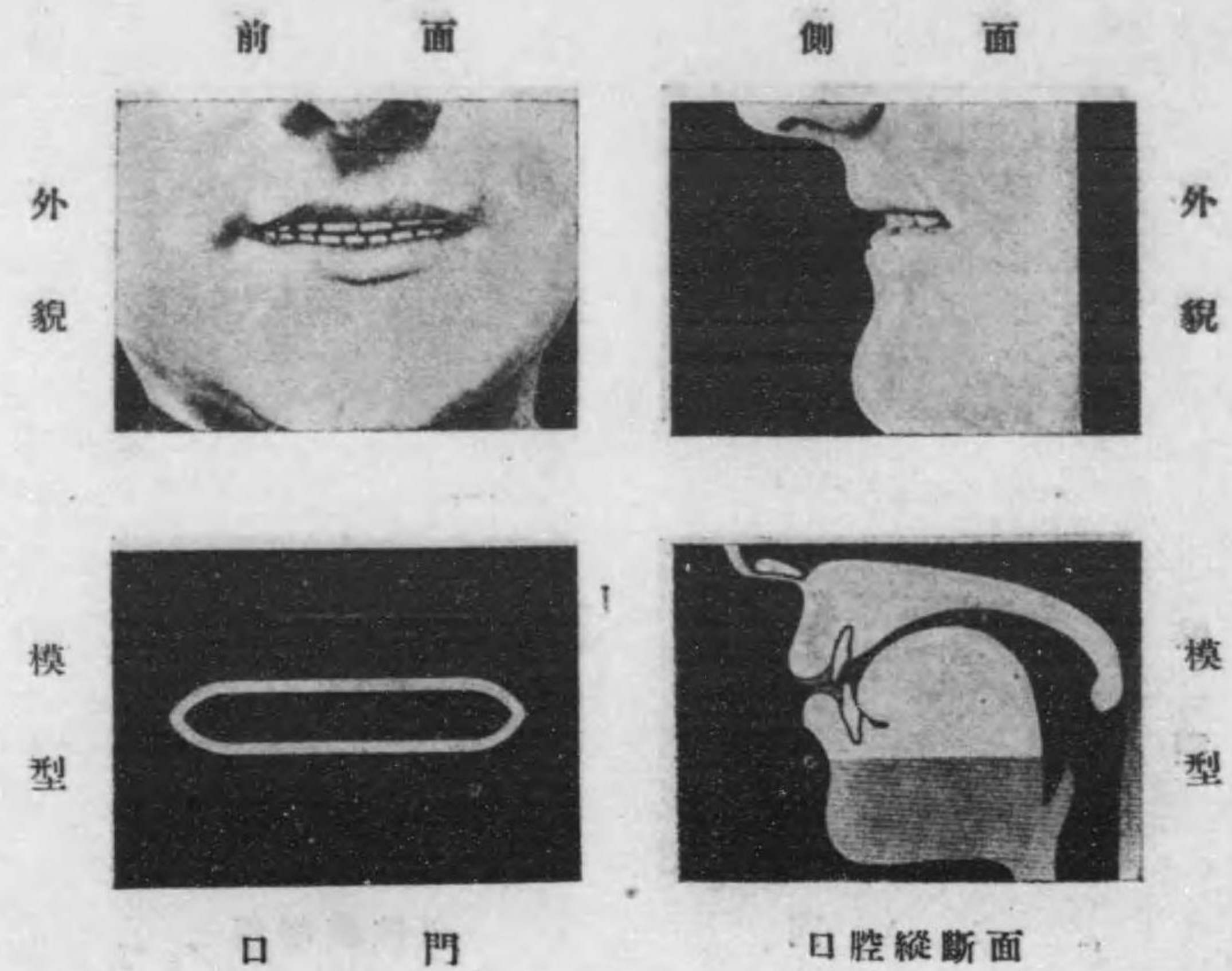
口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動す。

氣流 尋常。

## 第十一圖 i.

長音の例: die Liebe. 短音の例: die Lippe.



唇 7-10 mm の口門を成す。左右の角著しく後に引き締まる。

齒 上下兩門齒の尖端前後併列して殆んど相重なる。

舌 尖端は下齒列に接し、肉量中央に集まりて硬口蓋に向ひ大に隆起す。

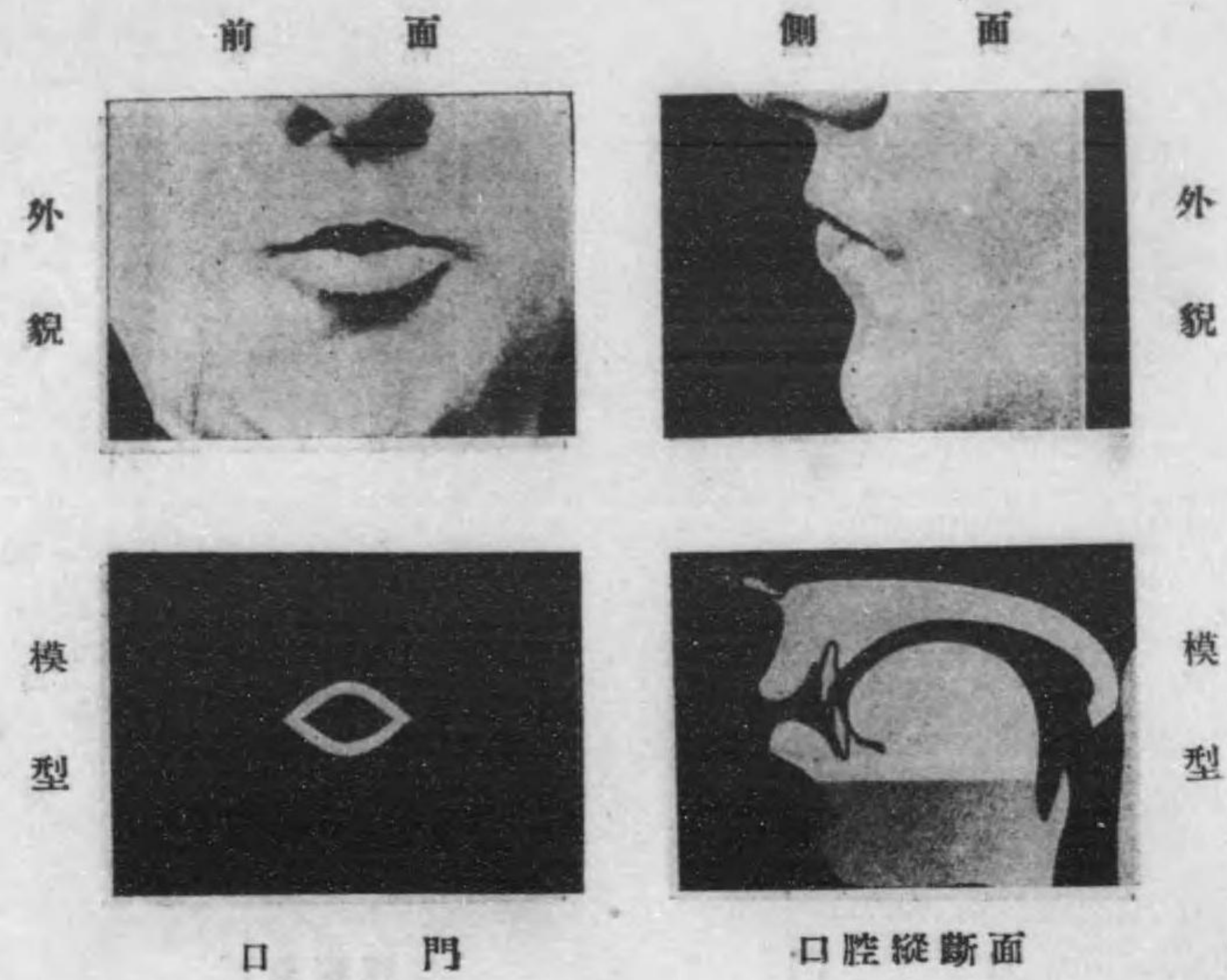
口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動す。

氣流 尋常。

## 第十二圖 ü.

長音の例: der Hüter. 短音の例: die Hütte.



唇 形及び大き  $u$  に於けるが如し。口門 5-mm にして、左右の角微に後に引き締まる。

齒 上下兩門齒の尖端前後併列して殆んど相重なる。

舌  $i$  に於けるが如し。尖端は下齒列に接し、前部中部は硬口蓋に接近し、口腔の中央に狹隘なる氣道を残すのみ。

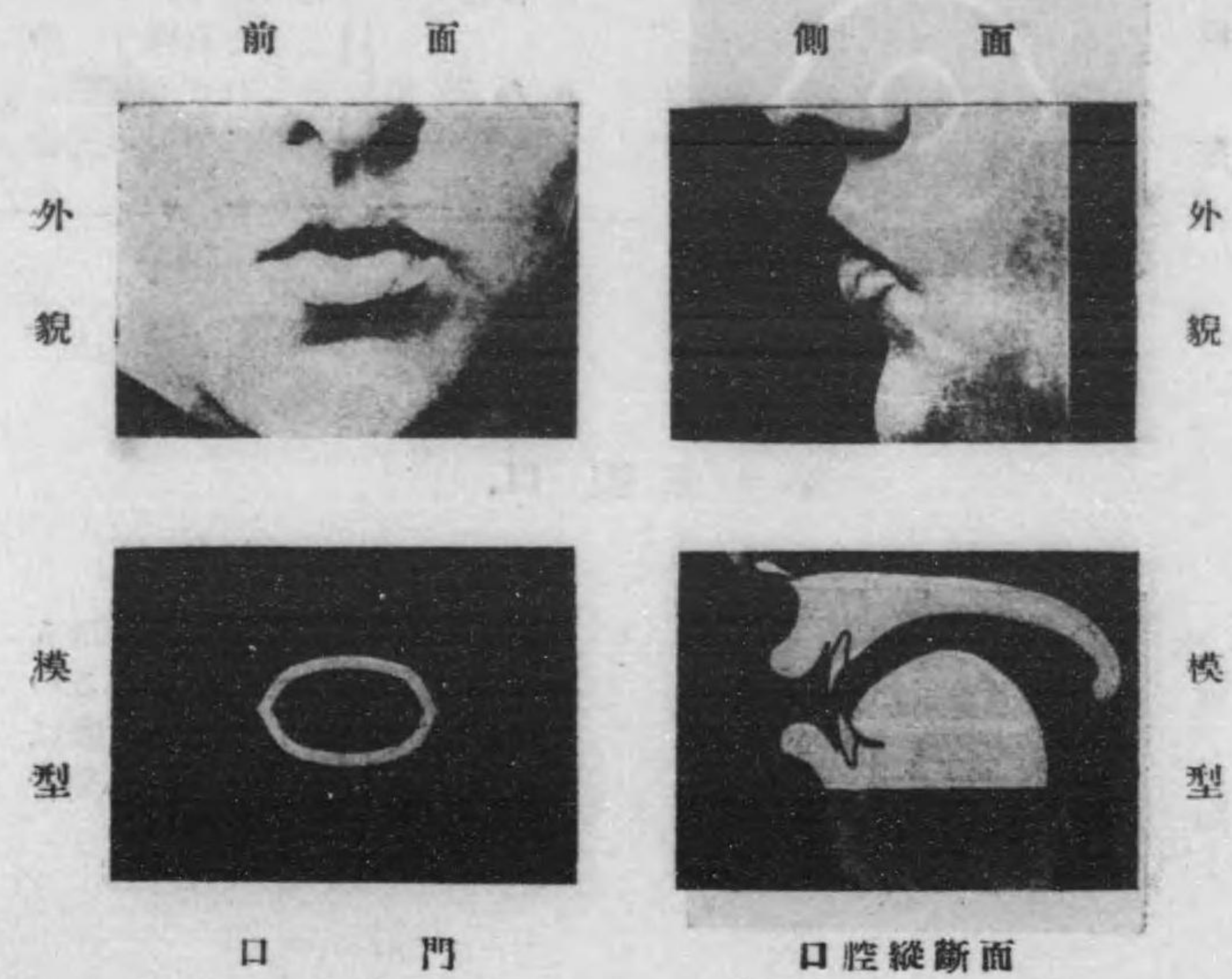
口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動す。

氣流 尋常。

## 第十三圖 ö.

長音の例: die Öfen. 短音の例: öffnen.



唇 形及び大き  $o$  に於けるが如し(口門 7 mm)。e に倣ひて口門を聊か平扁にす。

齒 上下門齒の垂直間隔 4 mm。

舌  $e$  に於けるが如し。尖端は下顎の門齒に接し、背上に縦貫せる溝を生ず。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動す。

氣流 尋常。

第十四圖 au.



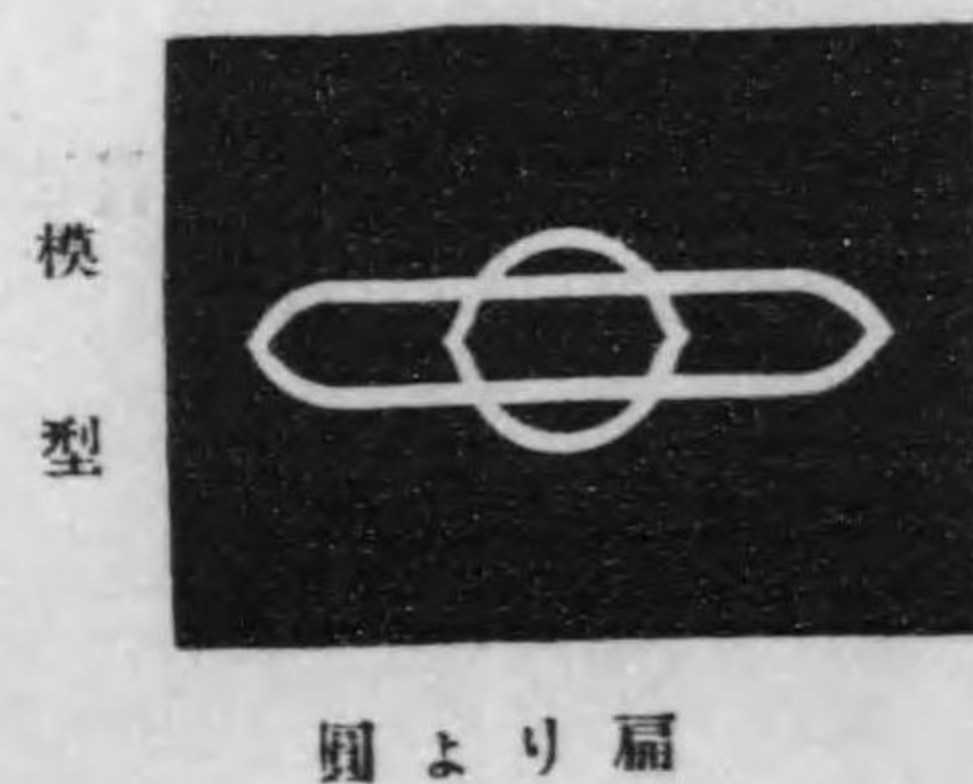
a に始まり } 吾人は au を語る  
o を経て } ことを自覚するの  
u に終はる } みなれども實際は  
                  } 其間に無数の間音  
                  } を含めり。

第十五圖 ei.



a に始まり } 吾人は ei を語る  
e を経て } ことを自覚するの  
i に終はる } みなれども實際は  
                  } 其間に無数の間音  
                  } を含めり。

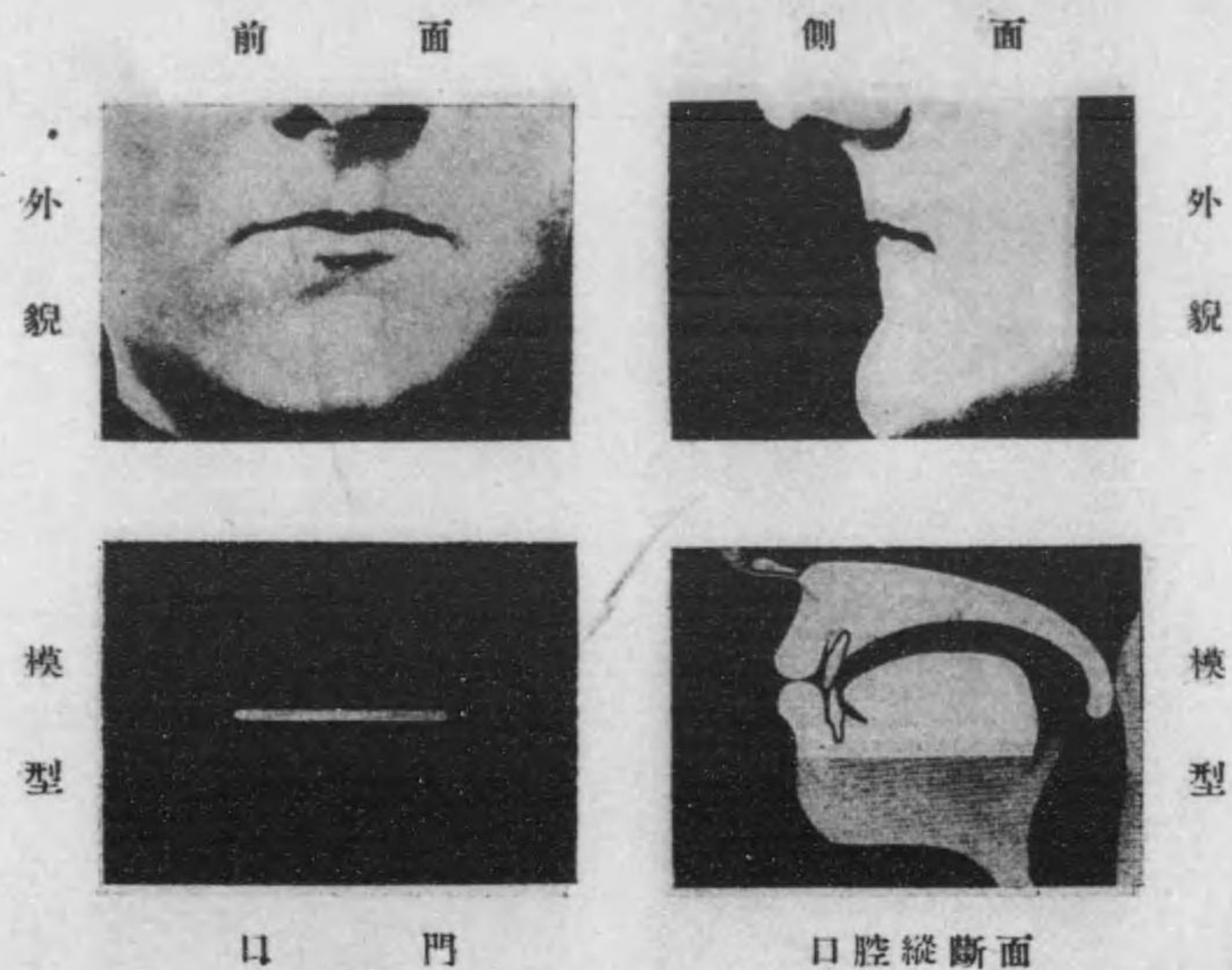
第十六圖 eu.



o に始まり } 吾人は eu を語る  
e を経て } ことを自覚するの  
i に終はる } みなれども實際は  
                  } 其間に無数の間音  
                  } を含めり。

第十七圖 p, b.

例: die Bein, das Bein.



唇 p: 強く閉鎖し、口腔に呼氣の密集するに同時に弾開す。  
b: 閉鎖稍々弱く、弾開稍々緩なり。

齒 上下の門齒前後に併列して其の尖端殆んど相重なる。

舌 自然に安定す。

口蓋幕 咽腔後壁に接して鼻腔の裏門を閉鎖し、呼氣をして鼻腔を通過せざらしむ。

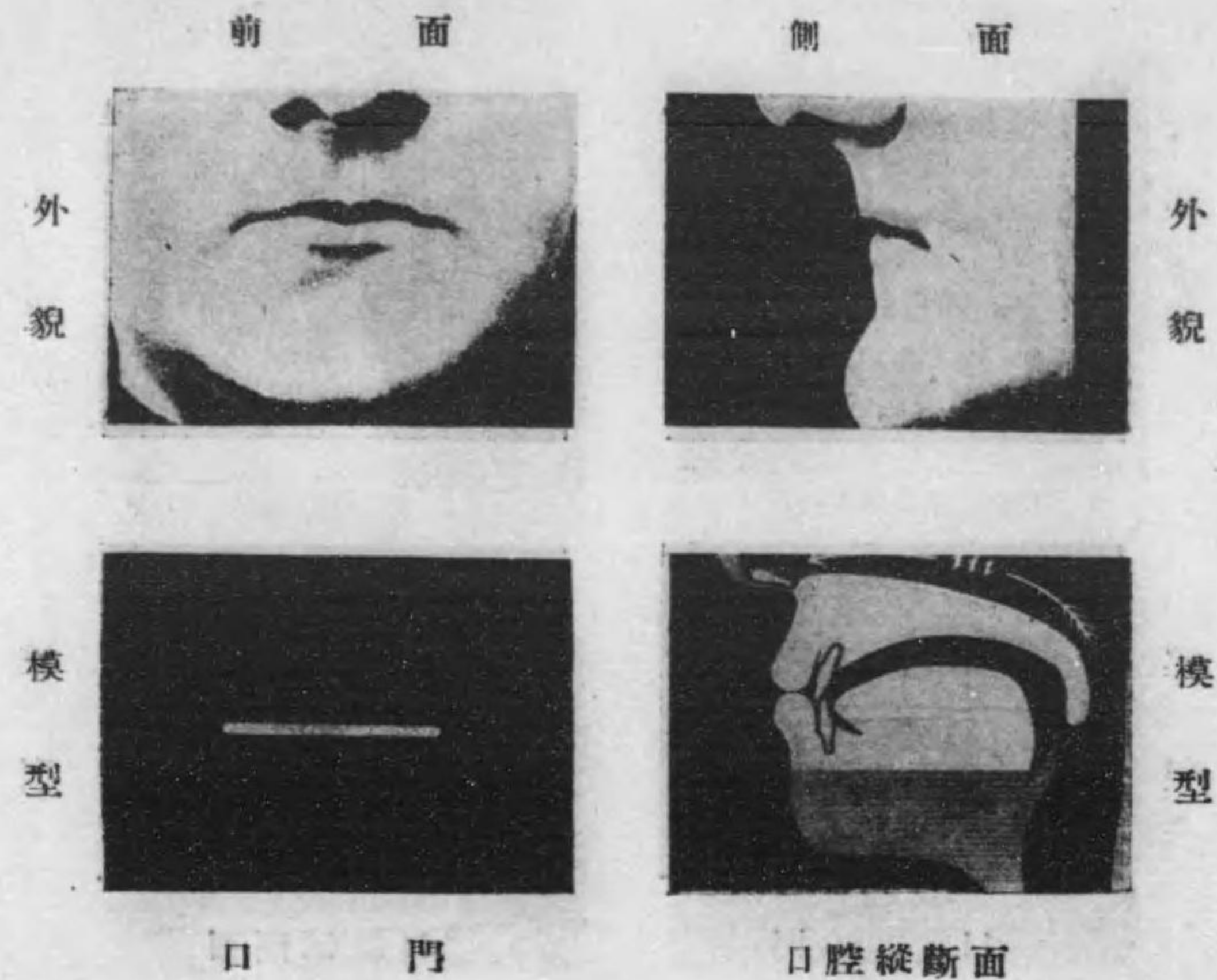
聲帯 p: 震動せず。  
b: 震動す。

氣流 p: 稍々強し。  
b: 尋常。



## 第十八圖 III.

例: die Macht, der Mensch.



唇 閉鎖に於けるよりも更に弱く、弾開亦頗る緩なり。

齒 上下の門齒前後に併列して其の尖端相重なる。

舌 自然に安定す。

口蓋幕 垂下して呼氣徐に鼻腔を通過す。

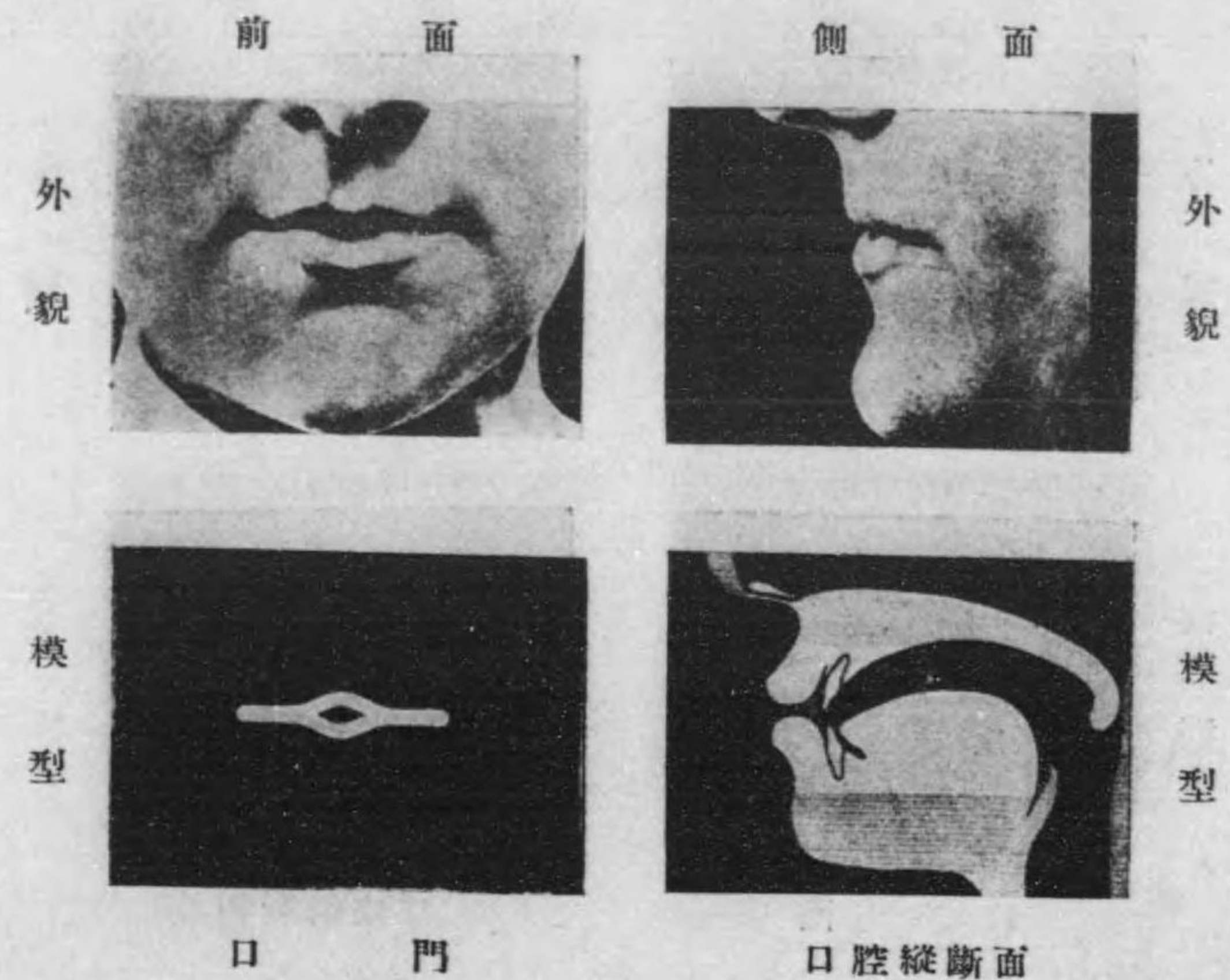
聲帯 震動す。

氣流 尋常。

## 第十九圖 IV.

(南獨の兩唇音)

例: der Wagen (南獨); die Schwester (北獨は稀).



唇 縦 1/2-1 mm、横 8-10 mm の口門を成す。

齒 上下の門齒前後に併列して、其の尖端殆んど相重なる。

舌 自然に安定す。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動す。[ch, ʒ] に於ては人に依り震動せざるこゝあり。

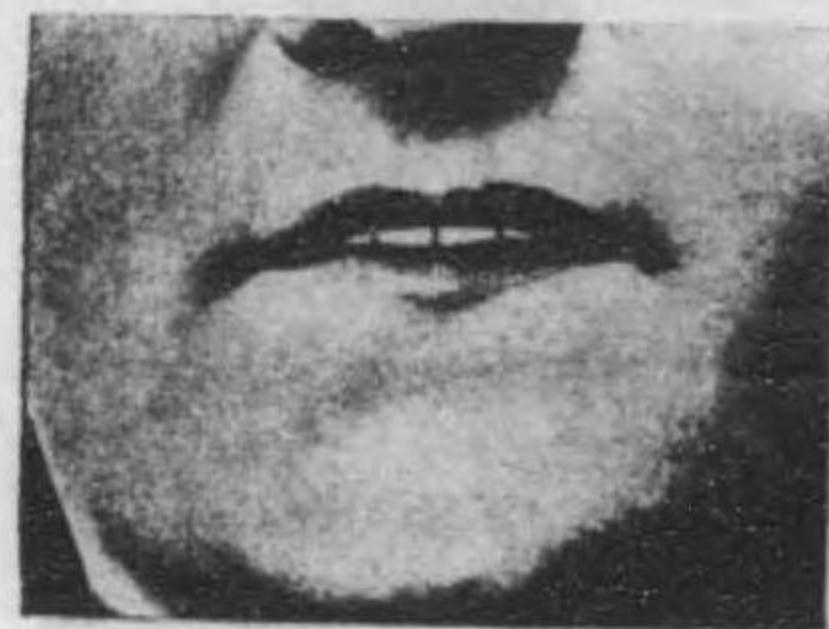
氣流 尋常。

第二十圖 f, w.

例: die Fahrt, der Vater, der Philosoph;  
der Wagen, die Schwester.

前 面                      側 面

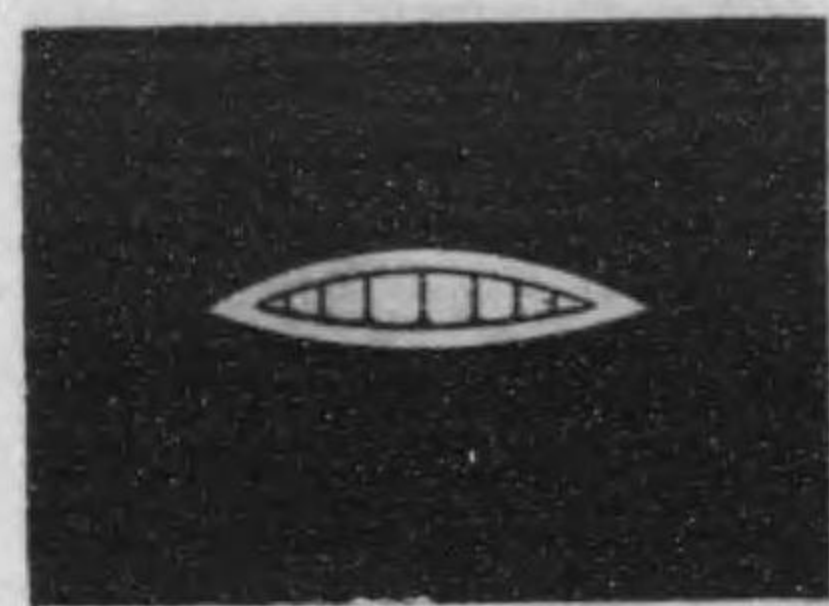
外  
貌



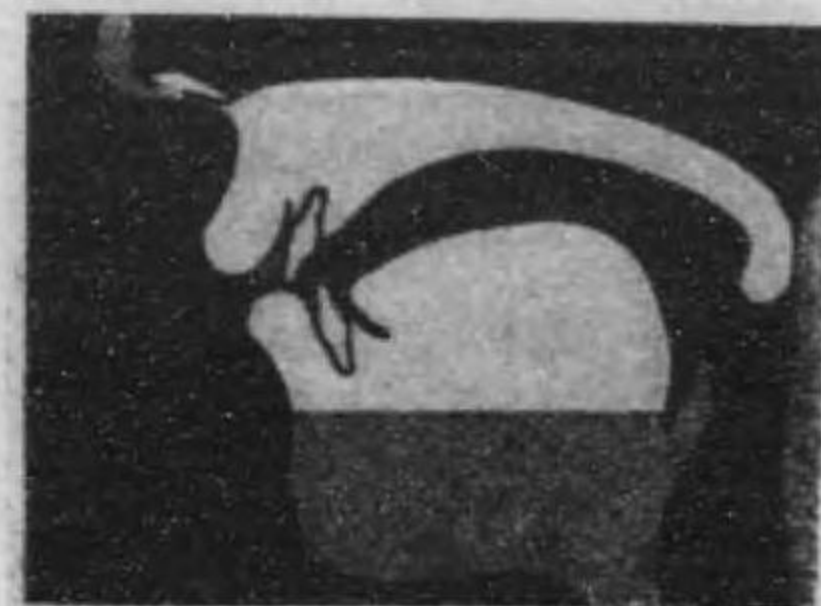
外  
貌



模  
型



模  
型



口 門

口腔縦断面

- 下顎 少しく後退す。
- 唇 下唇引つ込む。
- 歯 上門歯下唇の内縁に觸る。
- 舌 自然に安定す。
- 口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。
- 聲帯 f: 震動せず。
- w: 震動す。
- 氣流 尋常。

第二十一圖 β, f.

例: reißen, essen, der Ast, das Eis;  
reisen, der Efel, das Eisen.

前 面                      側 面

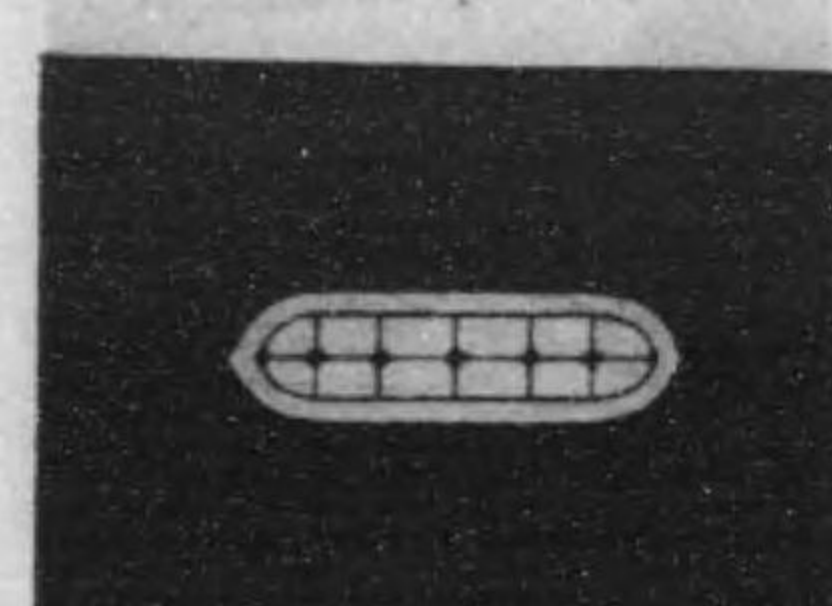
外  
貌



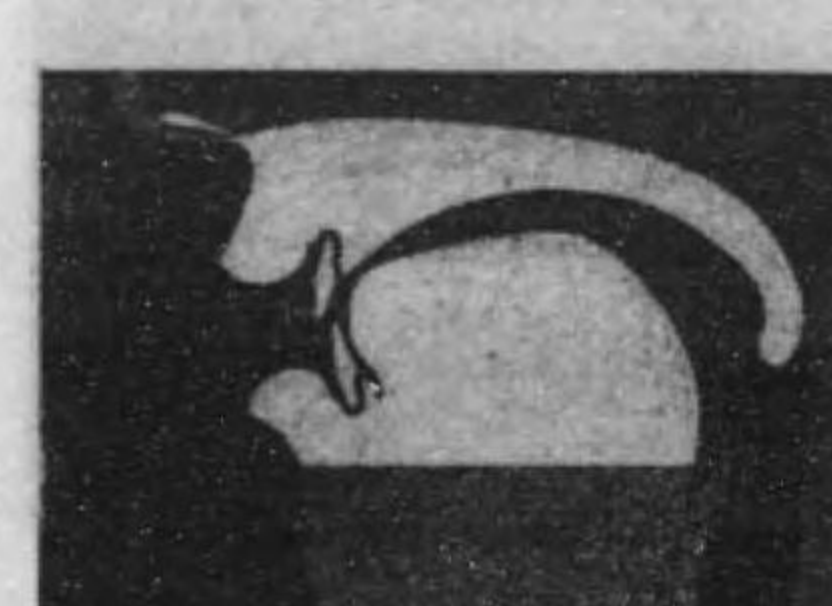
外  
貌



模  
型



模  
型



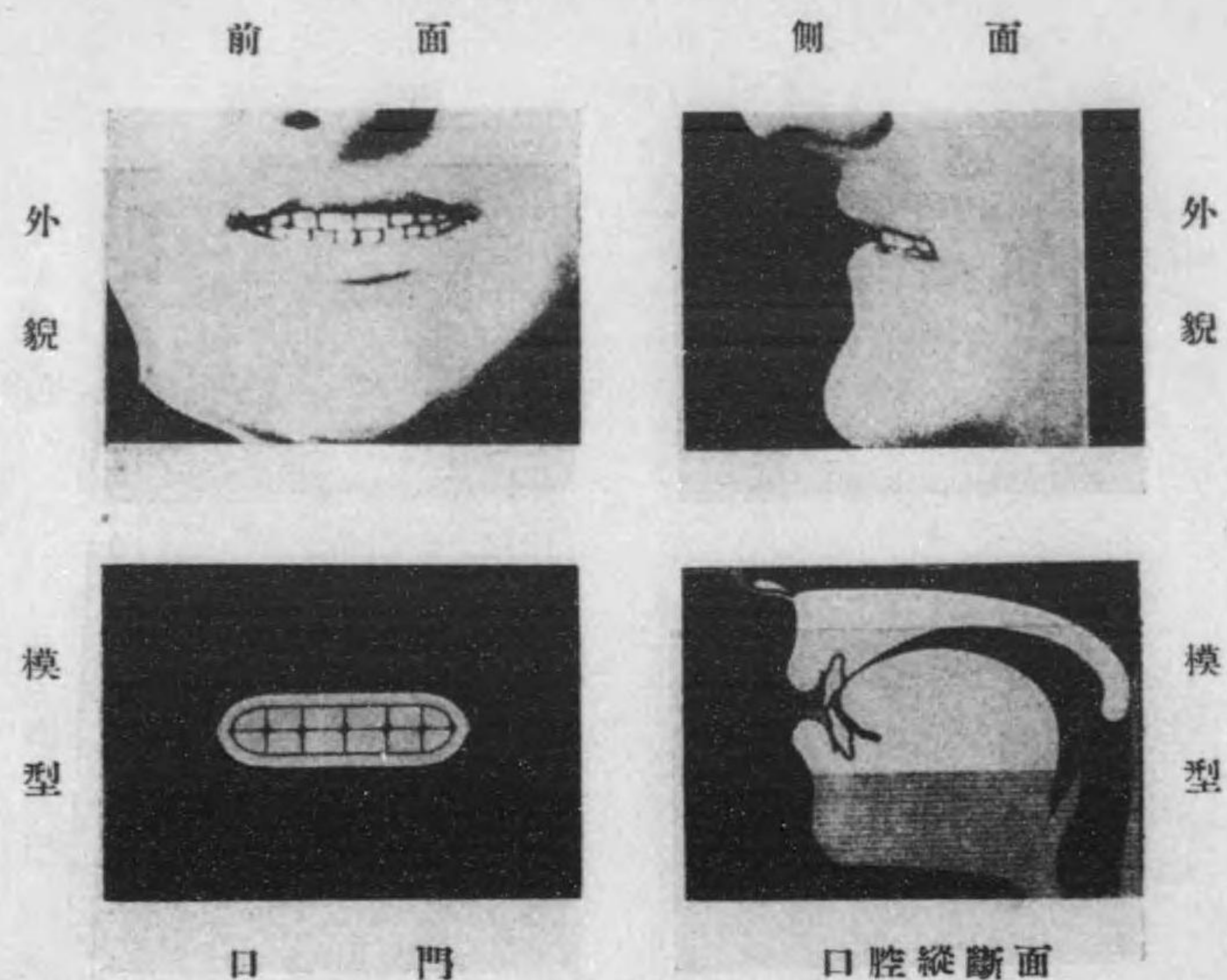
口 門

口腔縦断面

- 唇 唇 5-7 mm の口門を成し、左右の兩角微に後に引き締る。
- 歯 上下の門歯前後に併列して相重なる。
- 舌 尖端は下顎の門歯に觸れ、前舌は上齒齦に接近し、背面に縦貫せる溝を生ず。
- 口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。
- 聲帯 β: 震動せず。
- f: 震動す。
- 氣流 尋常。

## 第二十二圖 t, d.

例: der Teich, tot; der Deich, dulden.



唇 口門聊か平扁にして、豎 7 mm の間隙あり。

齒 上下の門齒前後に併列して其の尖端殆んど相重なる。

舌 兩側上齒列に密着し、尖端門齒に達し、前舌上齒齦を壓す。

t: 前舌強く氣道を杜塞し、口腔に呼氣の密集するを同時に弾開す。

d: 閉鎖稍々弱く、弾開亦稍々緩なり。

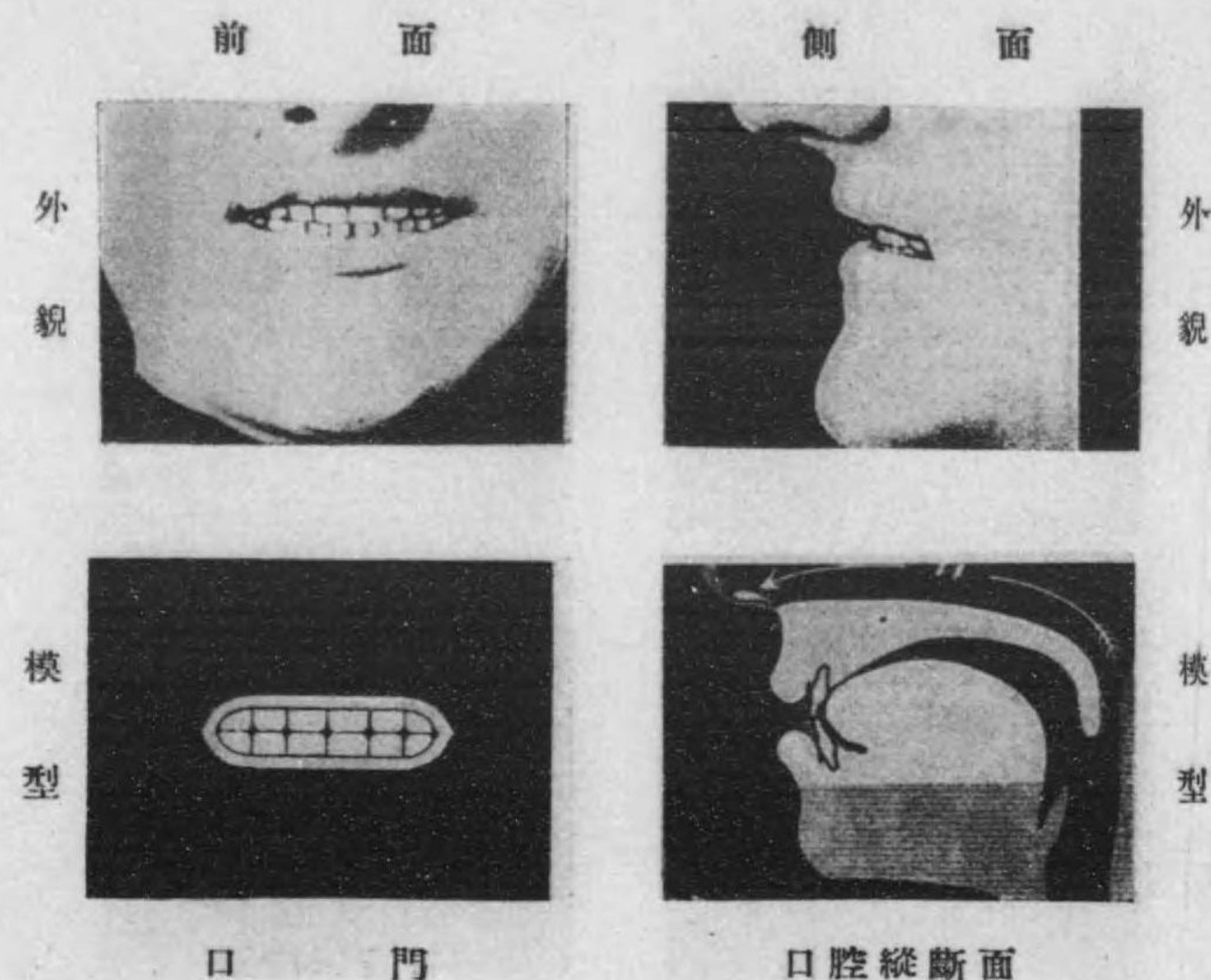
口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帶 t: 震動せず。 d: 震動す。

氣流 t: 少しく強し。 d: 尋常。

## 第二十三圖 n.

例: nein, nun, neun, nennen.



唇 口門聊か平扁にして、豎 5 mm の間隙あり。

齒 上下の門齒前後に併列して相重なる。

舌 兩側上齒列に密着し、尖端門齒に達し、前舌上齒齦を壓す。

但し閉鎖に於けるよりも更に弱く、弾開亦頗る緩なり。

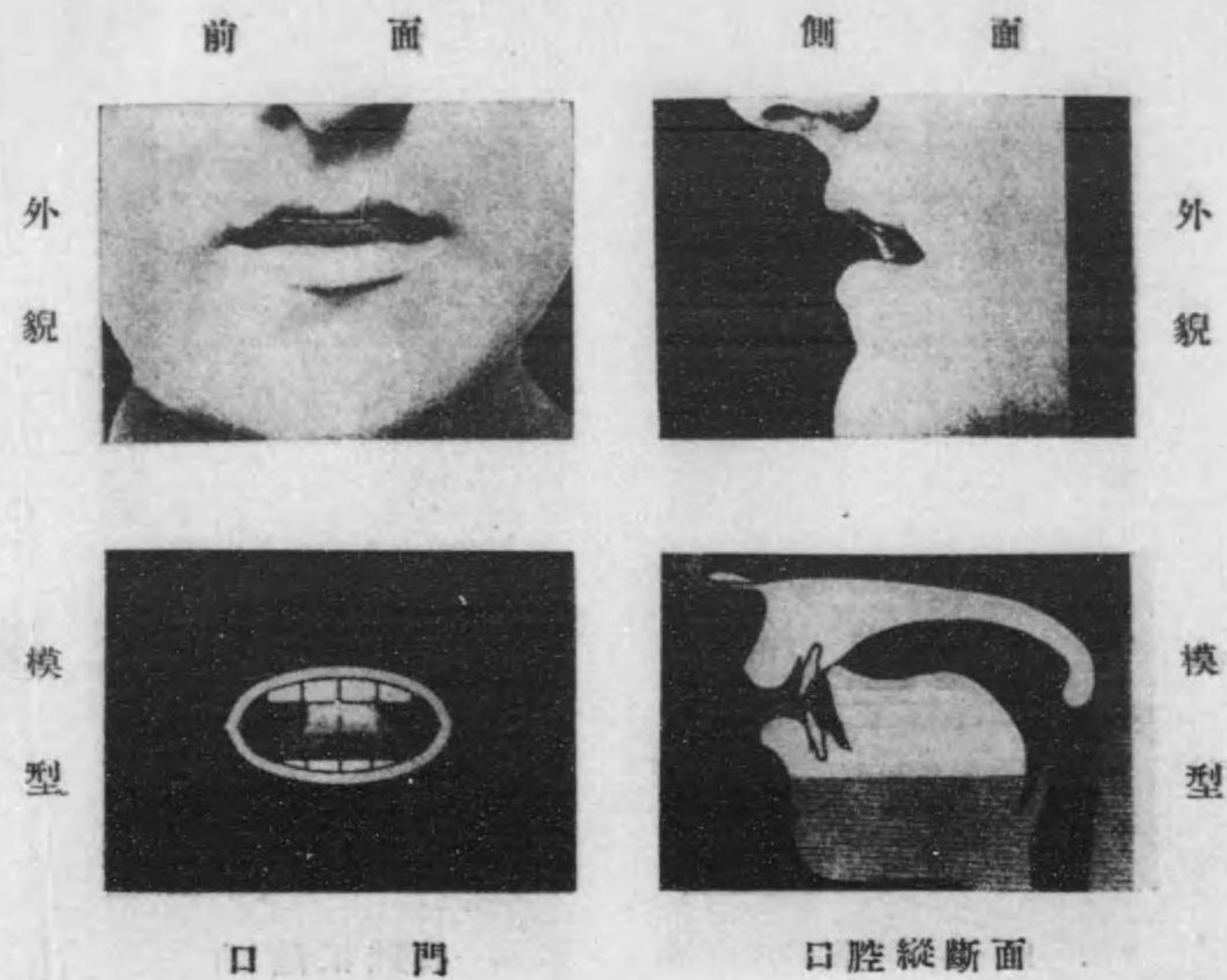
口蓋幕 垂下して呼氣徐に鼻腔を通過す。

聲帶 震動す。

氣流 尋常。

第二十四圖 l.

例: der Löffel, lau, fallen.



唇 縦 7-10 mm の口門を成す。

齒 上下門齒の垂直間隔 1/2-1 mm.

舌 末端軽く上齒齦を押し、兩側に間隙を残す。斯くの如くして生ずるは摩擦音にして、弾開の際更に爆音を起す。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動す。

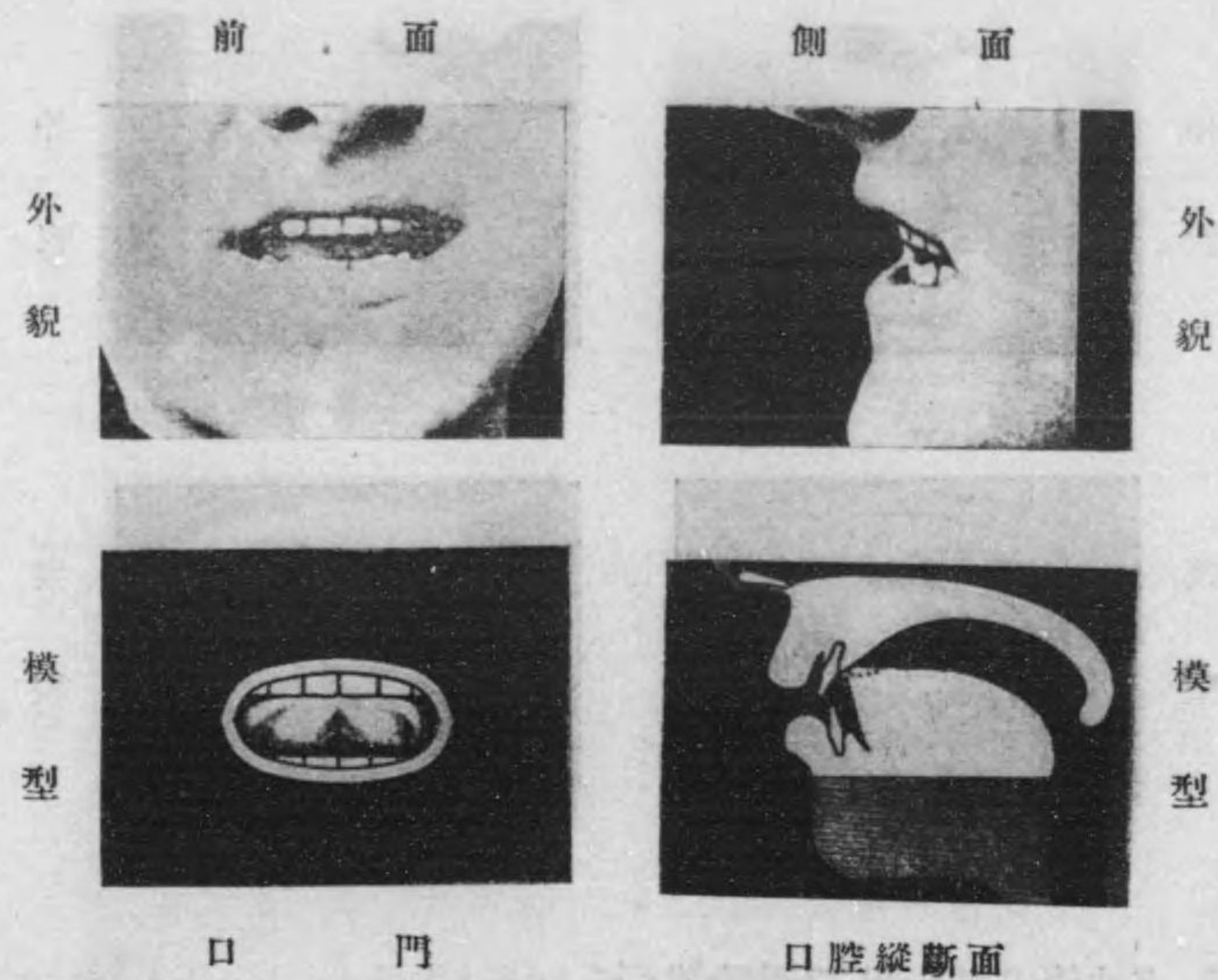
氣流 尋常にして徐に舌の兩側より逸出す。

(前面圖は故らに垂直の間隙を擴大して舌の作用を明かにす)

第二十五圖 r.

(舌 頭 音)

例: das Rohr, der Rauch.



唇 口門聊か平扁にして、縦 5-7 mm の間隙あり。

齒 上下の門齒前後に併列し、其の尖端殆んど相重なる。

舌 兩側は上顎の白齒に接し、末端は上齒齦に觸る。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

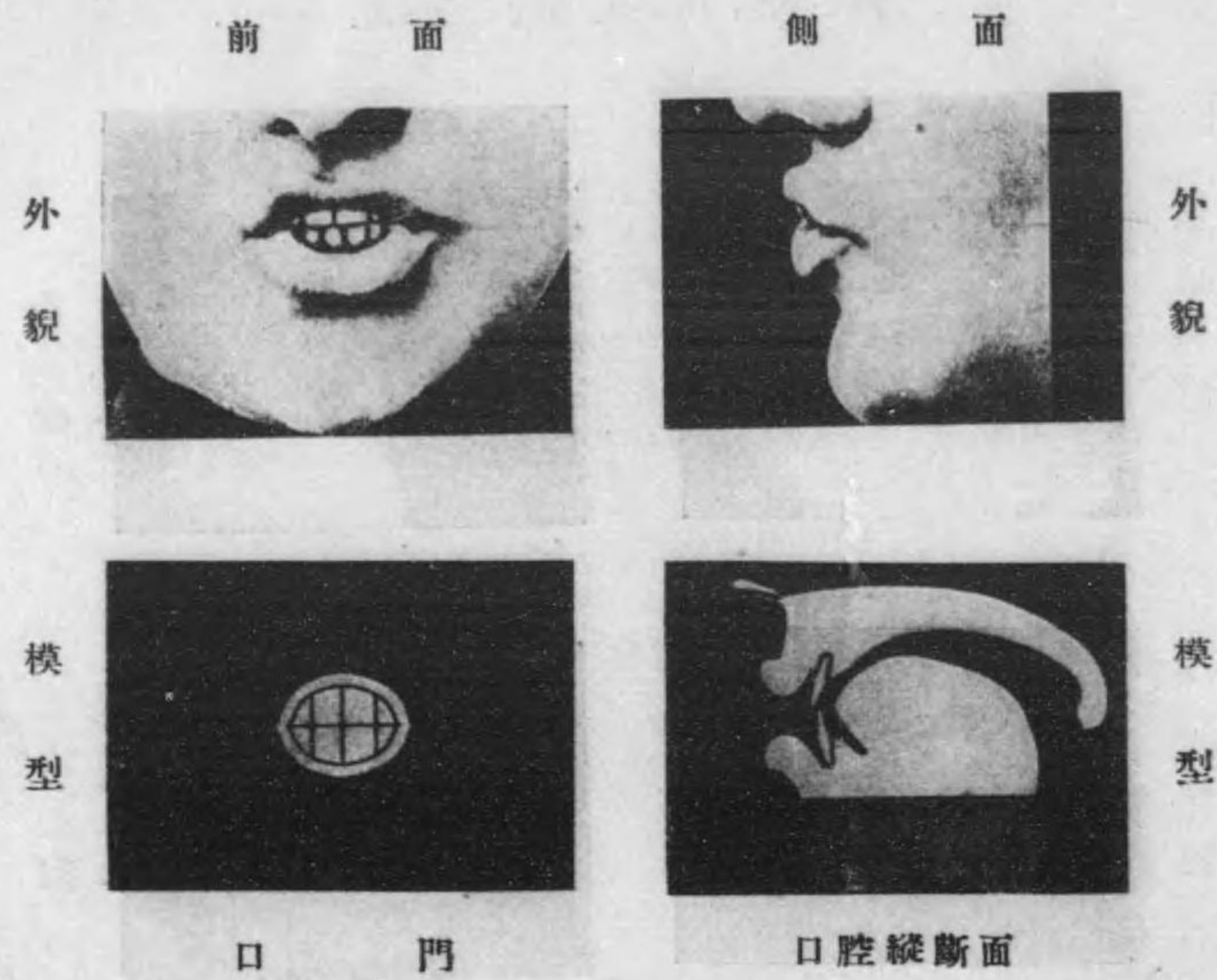
聲帯 震動す。

氣流 稍々強くして舌の弾力性開閉を起す。

(前面圖は故らに垂直の間隙を擴大して舌の位置を明かにす)

第二十六圖  $\text{f}$ .

例: der Schatz, die Schere, waschen.



唇 多少管の如き姿にて突き出づるを常とす。

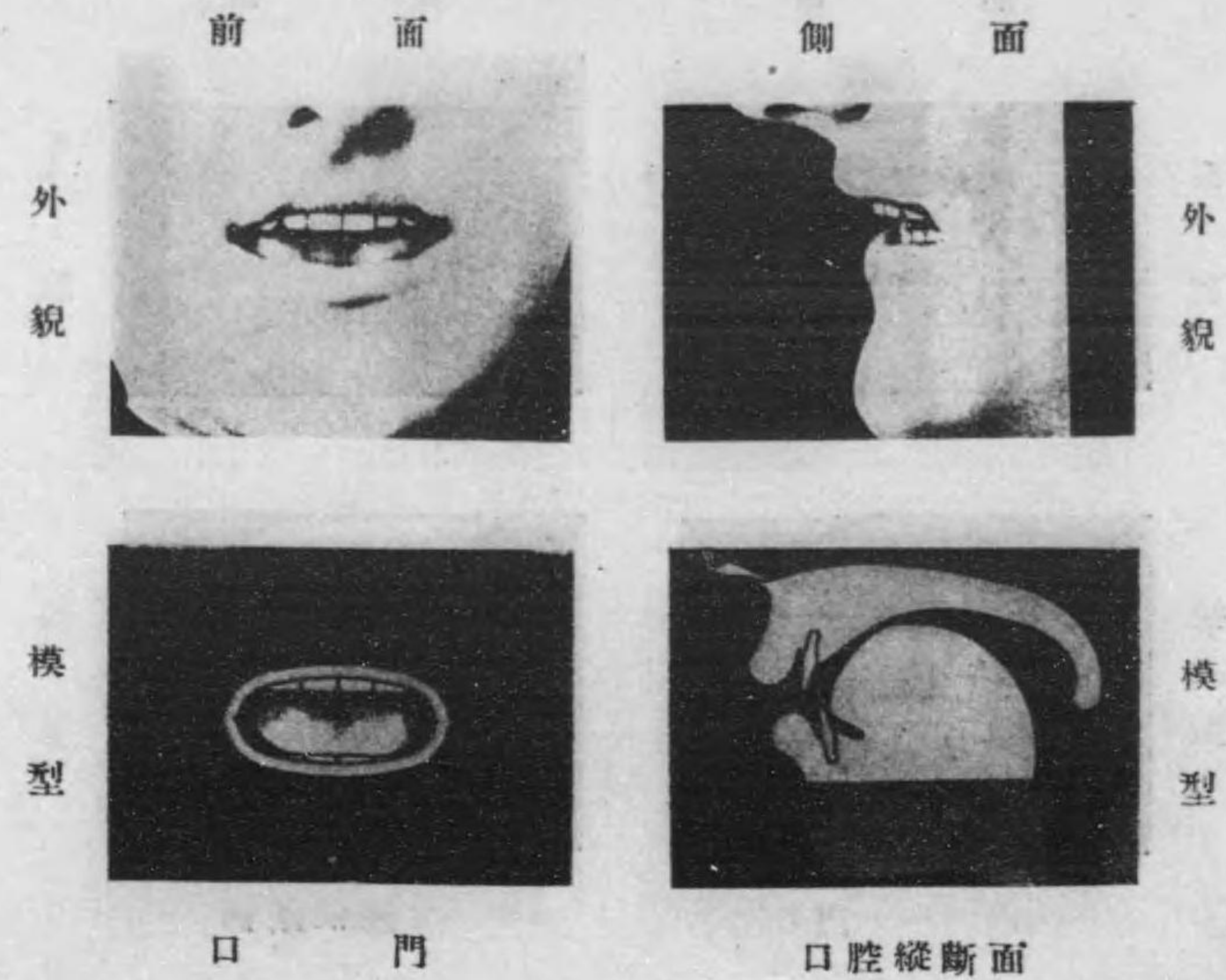
齒 上下の門齒前後して相重なる。

舌 後退して尖端上下門齒を離れ、前舌上齒齦に接近して背面に狭小なる溝を成す。狭窄局部  $\text{f}$ ,  $\text{i}$  に比すれば稍々廣くして硬口蓋前部に延長す。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動せず。

氣流 聊か強し。

第二十七圖  $\text{ch}$ ,  $\text{j}$ .例: ich, euch, frech, der Köcher, manch;  
ja, jung, Joseph.

唇 豎 6 mm の口門を成す。

齒 上下の門齒前後に併列して殆んど相重なる。

舌 下顎の門齒に添ひて延張す。中舌は硬口蓋中部に向ひ著しく隆起して狭窄を起す。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

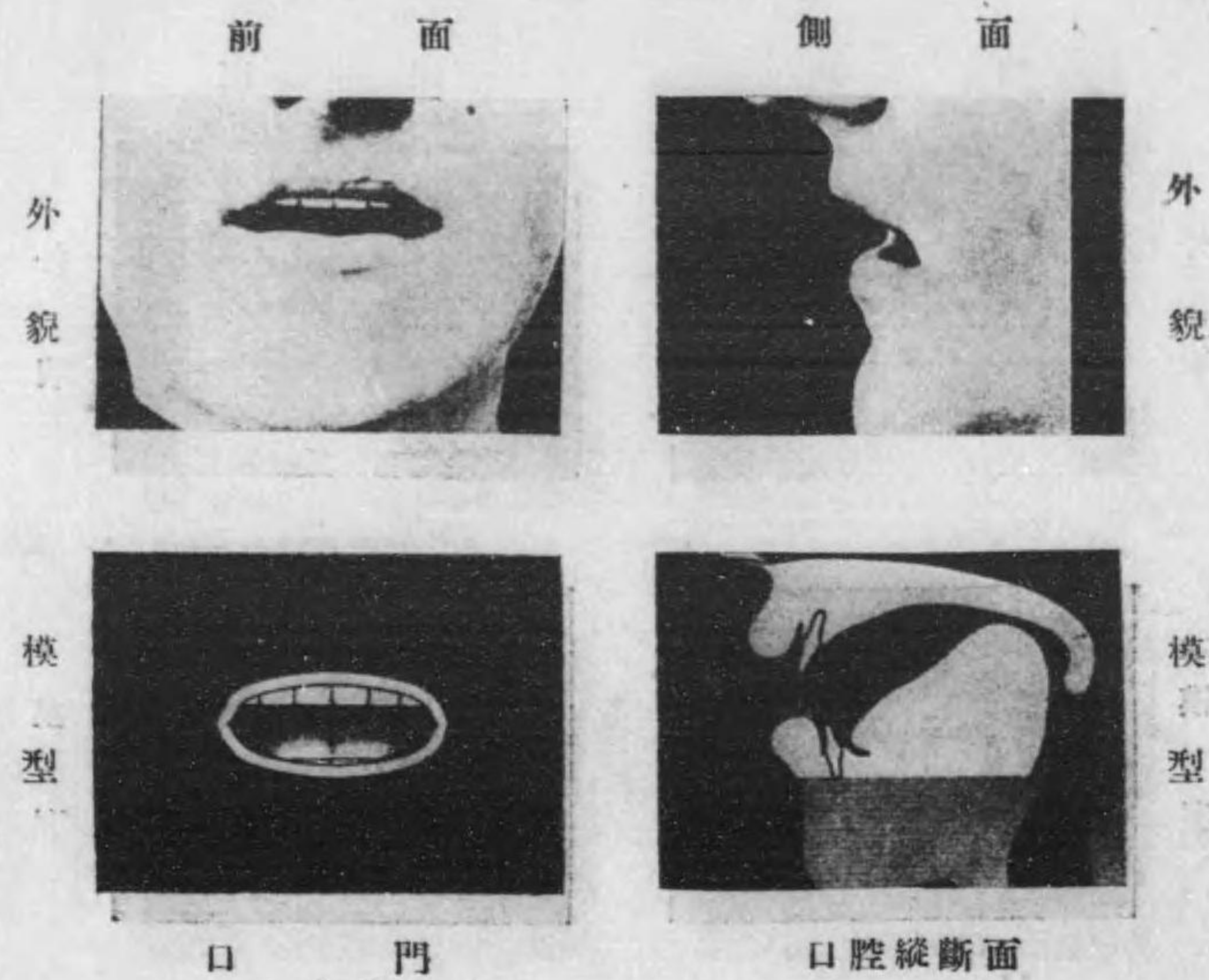
聲帯  $\text{ch}$ : 震動せず。  $\text{j}$ : 震動す。

氣流 尋常。

(前面圖は敢らに垂直の間隙を擴大して舌の作用を明かにす)

第二十八圖 **dh**.

例: das Dach, der Kuchen.



唇 唇 7-20 mm の口門を成す。但し u に伴ふ場合には最も狭く、  
a に伴ふ場合には最も廣し。

齒 上下門齒の垂直間隔 7-12 mm。

舌 著しく後退し、硬口蓋後部に於て又は軟口蓋に接近して狭窄  
を起す。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帯 震動せず。

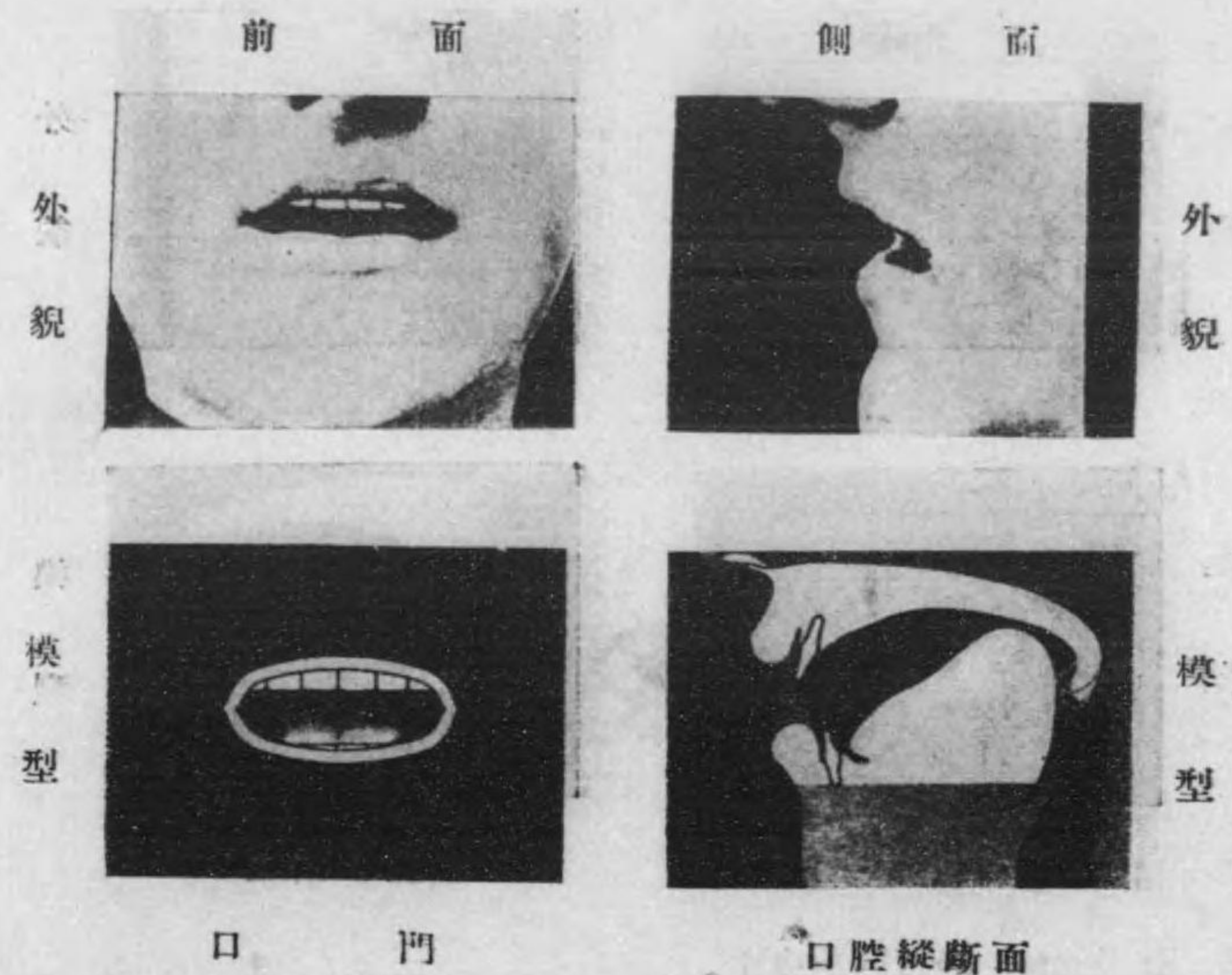
氣流 尋常。

(模型は故らに垂直の間隙を擴大して舌の作用を明かにす)

第二十九圖 **r**.

(懸壅垂音)

例: das Rohr, der Rauch.



唇 唇 7 mm の口門を成し、左右の角聊か後に引締まる。

齒 上下の門齒前後に併列して、其の尖端殆んど相重なる。

舌 著しく後退し、軟口蓋に向ひて大に隆起し、口蓋幕は咽腔後壁  
に接して呼氣の鼻腔に達するを防ぎ、懸壅垂は呼氣に振搖せ  
られて後舌と相觸れ反復性彈音を起す。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖するこゝ上文の如し。

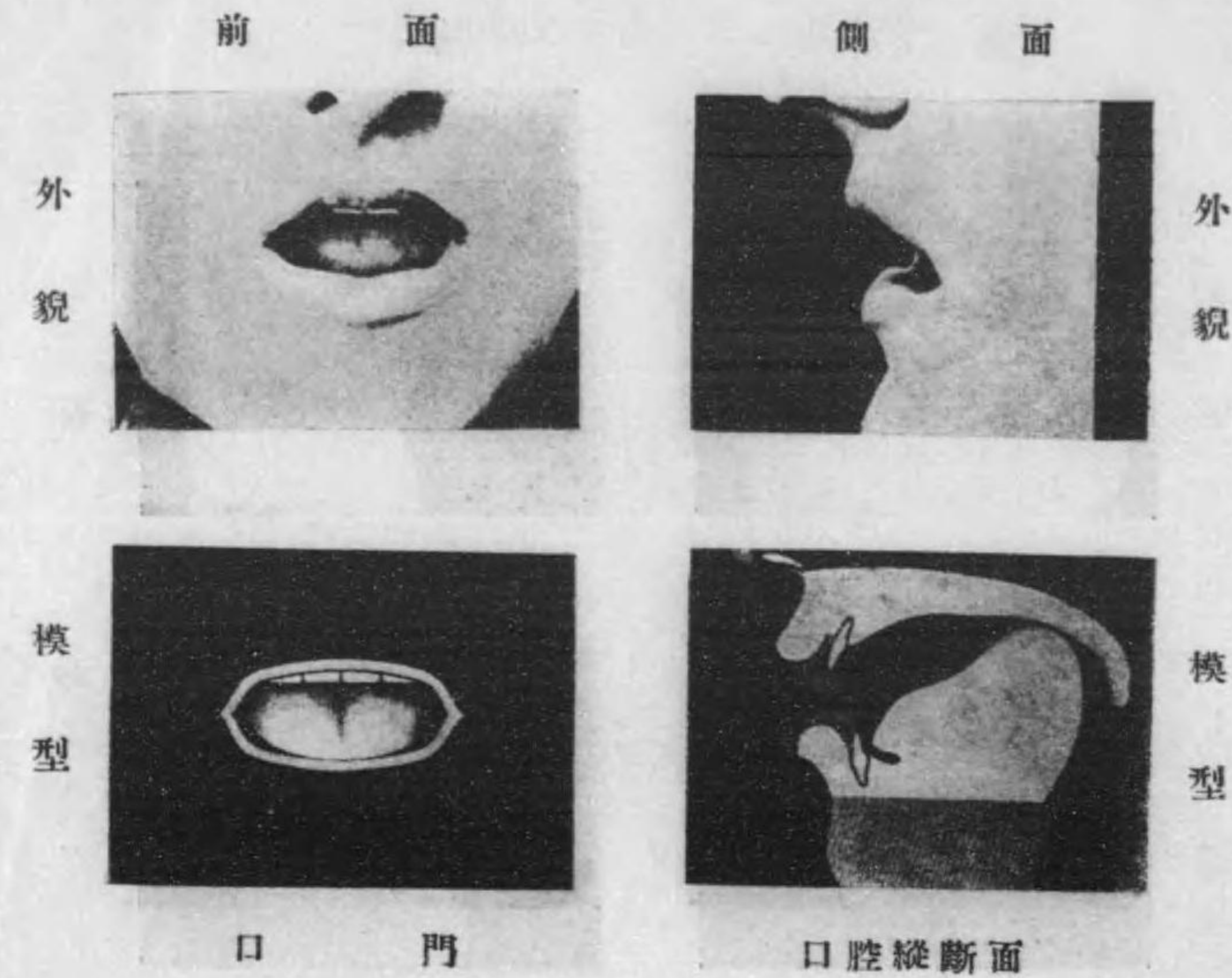
聲帯 震動す。

氣流 少々強し。

(模型は故らに垂直の間隙を擴大して舌の作用を明かにす)

## 第三十圖 f, g.

例: der Kuckuck; das Gold.



唇 豎 6 mm の口門を成す。

齒 上下の門齒前後に併列して、其の尖端殆んど相重なる。

舌 全く後退して硬口蓋後部に向ひ大に隆起し、氣道を杜塞す。

f: 咽腔に呼氣の密集するに同時に彈開す。

g: 閉鎖 f に於けるよりも稍々弱く、彈開亦稍々緩なり。

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

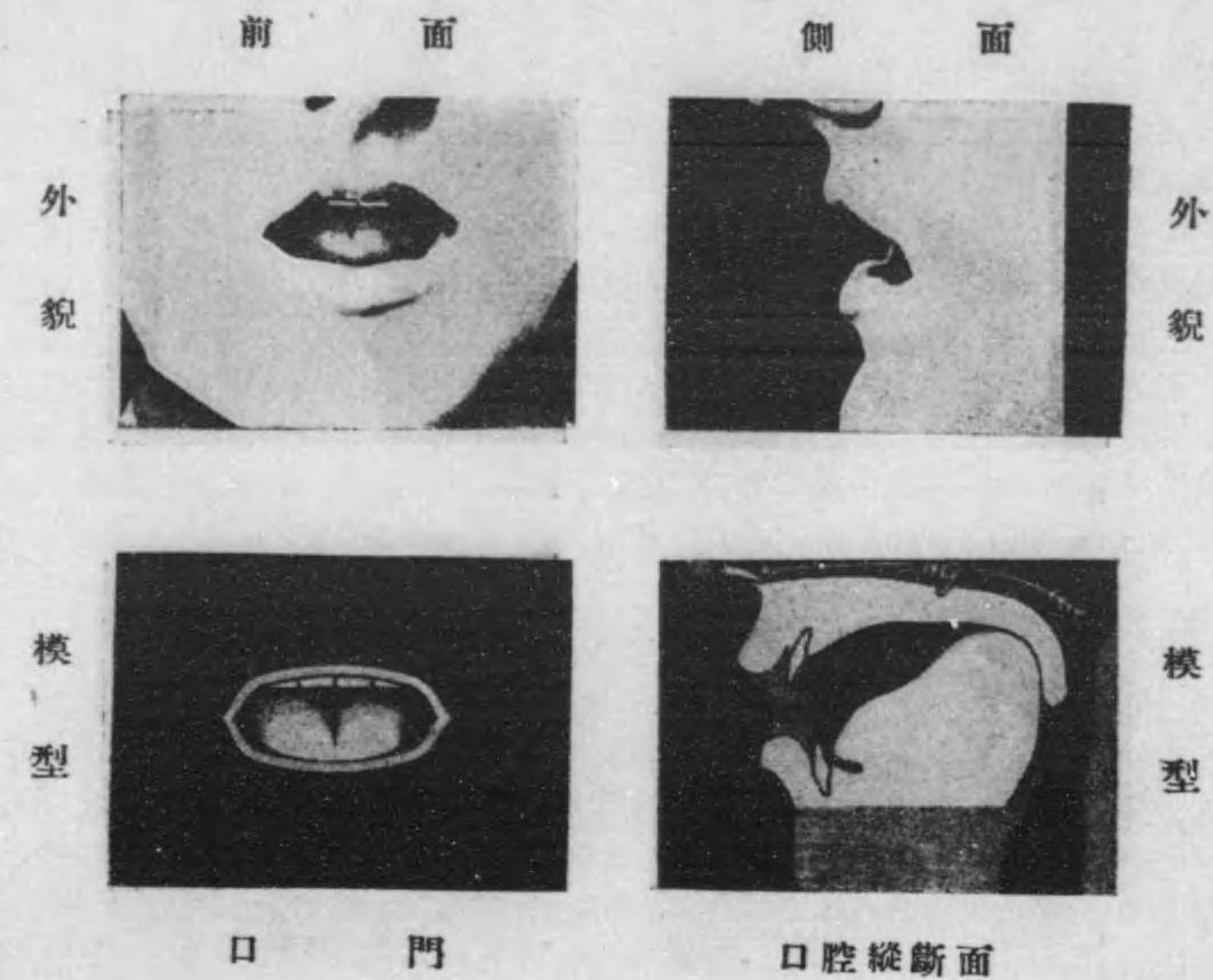
聲帶 f: 震動せず。g: 震動す。

氣流 f: 稍々強し。g: 尋常。

(口門は故らに垂直の間隙を擴大して舌の作用を明かにす)

## 第三十一圖 ng.

例: der Gang, jung, fügen.



唇 豎 6 mm の口門を成す。

齒 上下の門齒前後に併列して、其の尖端殆んど相重なる。

舌 全く後退して硬口蓋後部に向ひ大に隆起し、氣道を杜塞す。

閉鎖は g に於けるよりも更に弱く、彈開亦更に緩なり。

口蓋幕 垂下して呼氣徐に鼻腔を通過す。

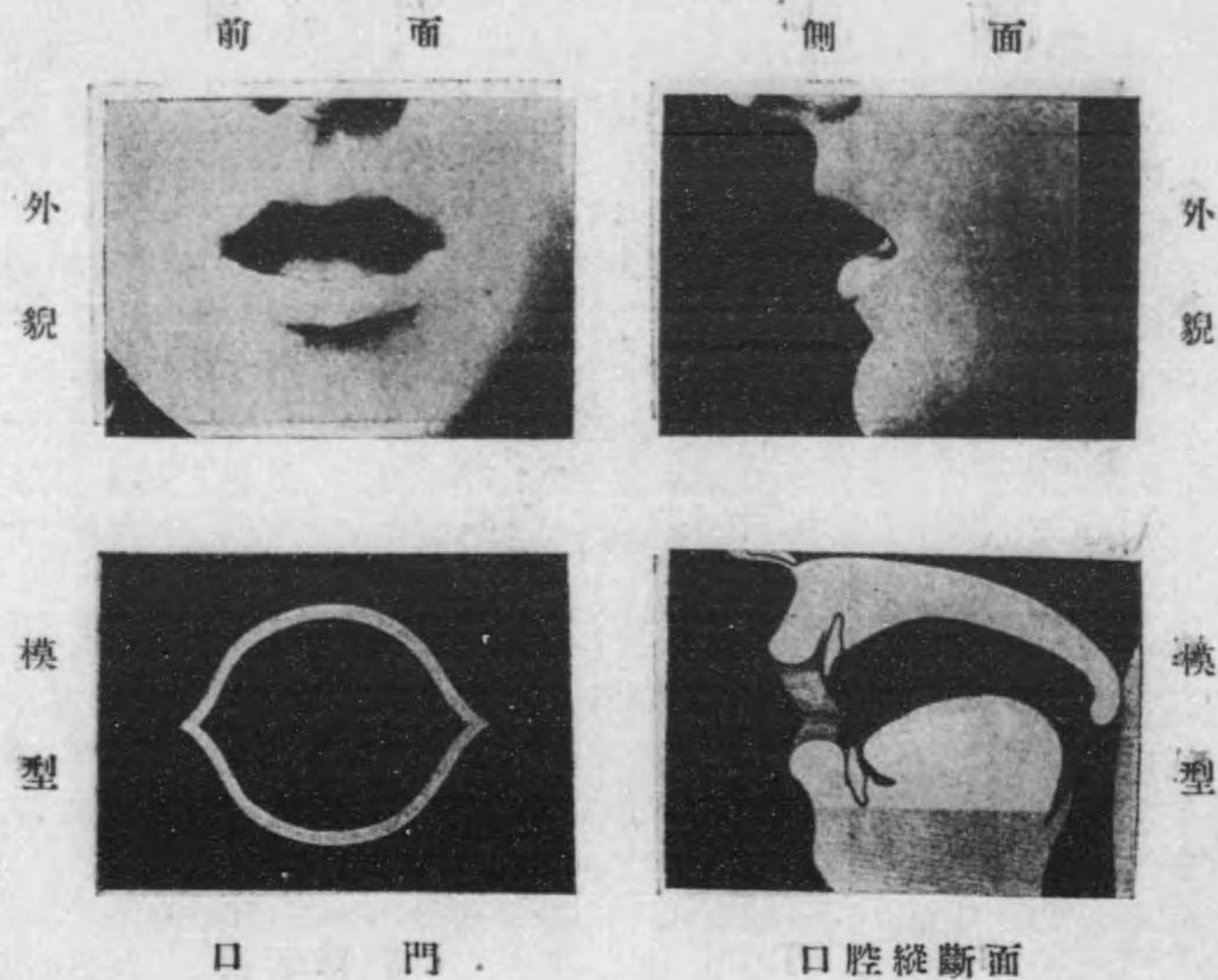
聲帶 震動す。

氣流 尋常。

(口門は故らに垂直の間隙を擴大して舌の作用を明かにす)

第三十二圖 h.

例: der Hauch, die Hand, das Haus.



唇 追發する母音と一致す。

齒 同上

舌 同上

口蓋幕 鼻腔の裏門を閉鎖す。

聲帶 震動せざるを常とす。

氣流 尋常。

(本圖はhの追發する場合を示す)

丸山通一著獨逸語教科書目錄

附諸大家批評

獨逸音聲學大意

第二版

正價貳拾錢

獨逸語の發音は廿世紀劈頭に於ける斯學界の大問題であつて、昨年來本紙の數號に涉つて内外人の間に大激論のあらはれたことは苟も獨逸語を修むる者の知らざるは無き事實である。本書は其議論の中心となつた丸山教授が緻密なる思想と概博なる智識とを以て音聲學に關する當代諸大家の著書數十種を咀嚼し、斯學に關して本邦人に最も必要にして適切なる所を採り、獨逸語修學者に發音の標準を與へ且全國諸學校の發音の統一を圖る目的を以て著述せられたるものであるから、斯學界の有益なる著作であることは疑も無い。又記述の順序、記載の材料も聊遺憾なく、表、圖、用語等凡て學術的に出來て居り且緒言には記號其他の用法も詳細に記載してある。詮ずる所、本書は諸學校に於て獨逸語を教ふる者にも、之を修むる者にも無二の羅針盤である。

獨逸語學雜誌第三年第十二號(明治卅四年八月廿日)

本書は獨逸語音聲學及び發音法をば邦文もて書ける著述の嚆矢なり。無意義なる發音論の行はるゝ今日、且獨逸語教授の某一校に於てすら更に統一的方法なく徒らに學生をして五里霧中に彷徨せしむる如き今日に於て之を統一し、之を活潑にし、之を進捗せしめむとする著者の意氣先づ以て壯とすべく、而して其言ふ所概ね穩當なる見解なるのみならず、深く日本學生の難易を察して獨逸人の所説以外別に斬新なる立脚地に基けるなぞ偶々以て著者の苦心慘憺たるを察すべく、わが獨逸語界は宜く此冊子を讀みて多大の裨益を得んこと疑なし。(鈔)

帝國文學第七卷第十一(明治卅四年十一月十日)

獨逸國家學論鈔

上卷

正價六拾錢

原書輸入杜絶して良好なる教科書に乏しきを感じつゝある折柄頗る有益なる御企と奉存候猶更に下巻をも速に御完成被遊學生界の渴望を充たし賜はん事を囑望に不堪候。

東京法科大學教授法博學士 吉野作造

御選擇誠に宜しきを得て戰爭繼續中なるご否ごに關らず獨逸法學生の爲めに有益なりと確信仕候。

東京法科大學教授法學博士 鳩山秀夫



誠に簡潔にして首尾一貫せる一編完全の國家學大綱と可申候且は獨逸書輸入杜絶の折柄學徒の便益此上も無之次第法學界及教育界の大幸と奉存候

東京法科大學教授法學博士 穂積重遠

材料の選擇に深く意を用ゐられ其方面の一般的智識を興ふる點に於ても又語學的にも正に恰好の教科書と存じ候。

第七高等學校教授 吹田順助

大家の活文字を通じて纏りたる或物を提供せむとの御用意の周到を感ぜられ候斯種の讀物最も拂底の折柄機宜を得たる御企と存候。

第六高等學校教授 雪山俊夫

**獨文小品** Perlen deutscher Erzählung 正價五拾錢

まことに材料佳良、好個の教科書を得たるを喜悅罷在候。

第五高等學校教授 長江藤次郎

**獨文劇詩梗概** 上卷 正價四拾五錢

周到なる御用意を以つて然るべく添削の筆を加へられたるのみならず選擇排列頗る其宜きを且つ誤植の跡を殘さざらんを努力せられたるは小生の最も敬服仕る處に有之候獨逸語教科書の出版せられたるもの汗牛充棟も尙ならずと雖も推稱するに足るもの少し茲に御著を得てその缺陷を補ふを得たるは獨逸語學の爲め祝慶に不堪候。

第五高等學校教授 西澤富則

内容の價値は論を俟たず裝幀優美にして且まことに使用に便なるべく好個の教科書と信じ申候。

第五高等學校教授 松尾精一

**戦前の獨逸** 卷一 正價七拾錢

獨逸語界のためかつは青年教育のため益々深く御盡瘁の段誠に人意を強ふする者これあり候此書の如きも現代の活きたる獨逸語を知らしむる上にかつは學生をして世界大勢の實際的智識を得せしむる上に大に資するところ可有之候。

第七高等學校教授 吹田順助

**戦前の獨逸** 卷二 正價八拾錢

フリートリヒ大王 ベツケル著 正價五拾錢

發行所

京都市上京區寺町通御池南  
東京市本郷區湯島切通坂町

南江堂京都支店  
南江堂書店

印刷所

會社  
合資 正文舍

印刷者

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地  
加藤晴吉

發行者

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地  
小立鉦四郎

著作者

丸山通一  
東京市小石川區原町十二番地



大正七年十一月廿六日發行  
大正七年十一月十五日印刷

正價五拾錢

323

287

終